「平成16年7月　福井豪雨」
被災児童生徒への

心のケアにかかわる養護教諭の支援活動

—養護教諭サポート隊の取り組み—

福井県学校保健会養護教諭部会

ま　え　が　き

「平成１６年７月福井豪雨」から８か月が経過しようとしています。一瞬にして濁流に呑み込まれた家屋や田畑も、多くの人々の力により復興が進み、徐々に元の姿を取り戻しつつあります。

この災害に際し、福井県学校保健会養護教諭部会では「養護教諭サポート隊」を結成し、災害を受けた子ども達の心のケアに重点を置いた活動を行いました。養護教諭として何かできることはないか、何かしなければという熱い思いが結集し、７月２９日から８月２０日までの間に、延べ１０８人の養護教諭が被災校に出向き、子ども達の話に耳を傾けながら活動を共にしました。表面上は明るく振る舞っていた子ども達でしたが、生まれ育った家や大切にしてきたものを失い、大きな精神的ショックを受けるとともに、避難所などでの不安な生活の中で様々な身体的・精神的症状を現していました。

私たちは子ども達と心を通わせるために、ゲームや手作り紙芝居を準備して訪問しましたが、子ども達一人ひとりが持つ心の問題の表れ方が多様であるため、個々の事例に応じた対応が必要であることを痛感しました。

今回の取り組みにおいては、養護教諭の専門性や職務の特質を生かすことを常に念頭に置いて、何ができるのかを問い続けた毎日でした。先の見えない手探りの中での実践でしたが、災害を体験した子ども達がつらい時期を乗り越えるためには、傷ついた心を正しく理解し、心に寄り添いながら愛情のこもった対応が大切であることを学びました。さらに、専門家の援助が必要なケースもありましたが、子ども達と毎日継続的にかかわっている養護教諭が、変化を見逃さず支援していくことが大切であると実感できたことは、私たちにとって大きな成果でありました。

本報告書は養護教諭サポート隊派遣の手順や経過、派遣された養護教諭による報告や引き継ぎノートの記録等をまとめたものです。今回得られた１００件以上の事例をもとに、災害時における養護教諭の支援のあり方を提言し、今後の災害発生時における支援活動の参考になれば幸いです。

平成１７年　３月

福井県学校保健会養護教諭部会
部会長　　間脇　真澄

目　次

まえがき　　福井県学校保健会養護教諭部会　部会長　間脇真澄

1　災害のようす ---------- 1

2　「養護教諭サポート隊」結成の経過 ---------- 3

3　派遣システム ---------- 5

4　支援活動の実際 ---------- 9
（1）被災状況の把握 ---------- 9
（2）サポート隊派遣 ---------- 11
○　派遣状況 ---------- 11
○　サポート隊間での報告及び連絡 ---------- 12
○　スポーツ保健課への連絡 ---------- 19
（3）支援活動の感想 ---------- 31
○　サポート隊としての感想 ---------- 31
○　被災地校養護教諭の感想 ---------- 42
（4）「心のケア」資料作りと活用 ---------- 50

5　養護教諭資質向上のための研修 ---------- 55
（1）平成１６年度福井県養護教諭夏季研修会 ---------- 55
（2）平成１６年度福井県養護教諭研修会 ---------- 57
（3）平成１６年度福井県養護教諭研究協議会 ---------- 60

6　活動の成果 ---------- 63

7　評価と課題 ---------- 65

8　資料 ---------- 67
（1）必須アイテム ---------- 67
（2）サポート隊の役割 ---------- 68
（3）県スポーツ保健課文書 ---------- 69
（4）心のケアシリーズ ---------- 73
（5）平成１６年度福井県養護教諭研修会　資料 ---------- 80
（6）平成１６年度福井県養護教諭研究協議会　講演資料 ---------- 84
（7）県養護教諭部会　会報 ---------- 92

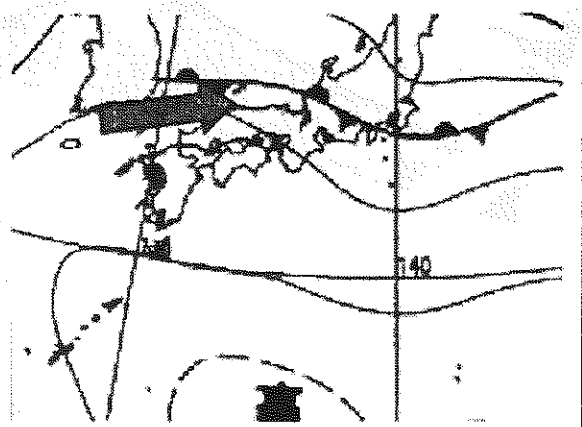
引用及び参考文献 ---------- 93
編集後記 ---------- 94

1　災害のようす

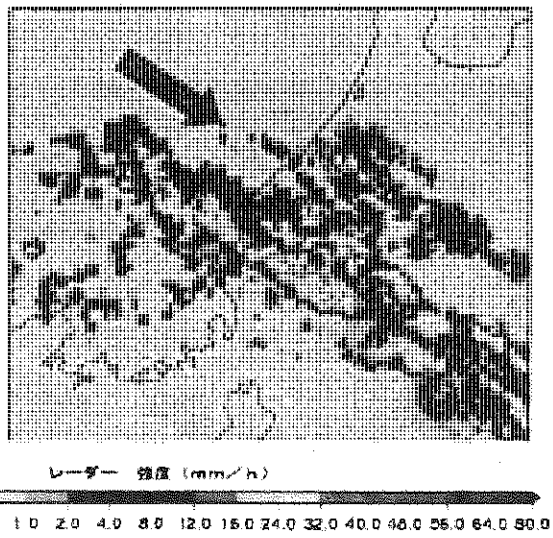
写真：美山町役場

1　災害のようす

７月１３日に新潟県に被害をもたらした梅雨前線が南下。一方で太平洋高気圧が西日本を覆い、暖かく湿った空気が高気圧の縁を回り込むように北陸沿岸に流れ込んだ。海で発生した強い雨雲が風に運ばれライン状に足羽川の上にかぶさるように県内に流れ込んだ。美山町では、１時間に９６ミリの雨が降った。６時間で２２８ミリ。千回に一回の大豪雨だった。最大流量は２，４００トンに上ることがわかった。

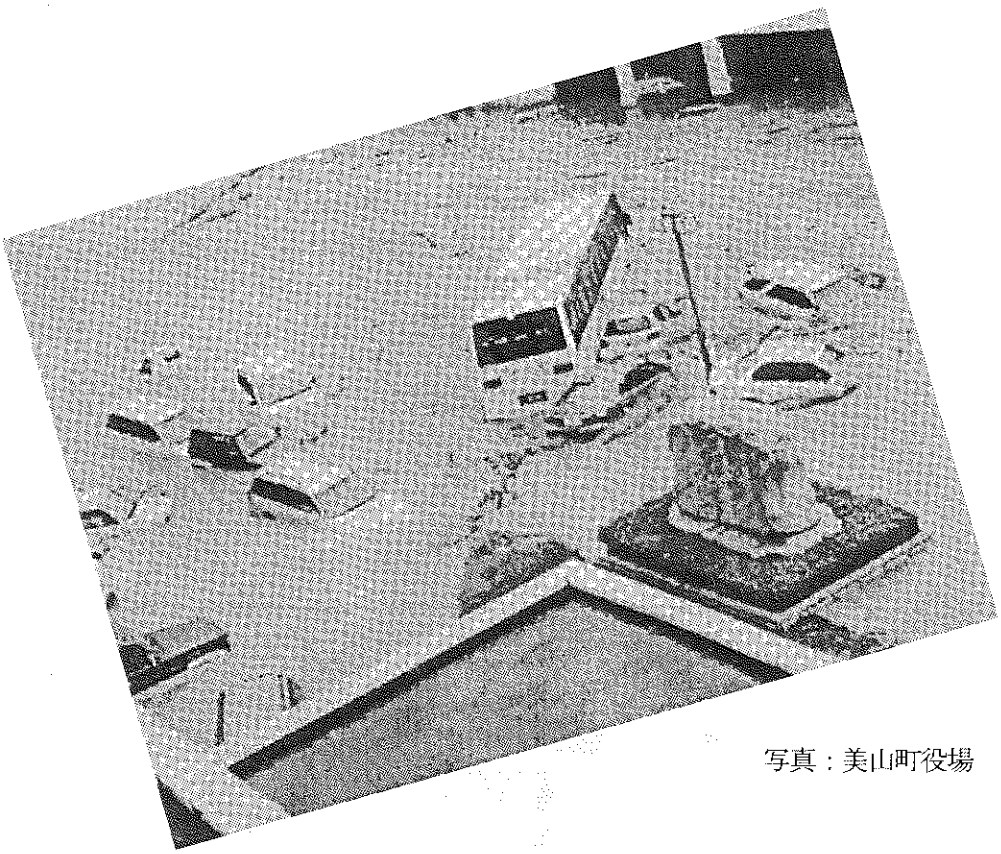


本県の嶺北地方に梅雨前線がある18日午前9時の天気図。暖かく湿った空気が矢印の方向で本県の沿岸に流れ込んでいた



18日午前6時時点での雨雲の様子を示した合成図。海上で発生した強い雨雲が矢印の方向に進み、足羽川の上空を覆うように次々と県内に流れ込んだ

７月２１日付　福井新聞



写真：美山町役場

わずか数時間の間に記録的な雨が降った「福井豪雨」。７月１８日未明から降り始めた雨は、土石流となって民家を襲い、濁流の怒号とともに川を突き抜け堤防を破った。美山町で午前９時４５分に足羽川が決壊、続いて福井市でも午後１時３４分に決壊し、家屋があっという間に濁流に呑み込まれた。あまりの速さに、地域によっては逃げる時間もその道筋も残されていなかったという。

「福井豪雨」は、死者４名、行方不明者１名、重軽傷者１９名、全壊６６世帯、半壊１３５世帯、床上浸水４，０５２世帯、床下浸水９，６７５世帯という未曾有の被害をもたらした。学校自体が土石流や浸水の被害にあい、グラウンドの冠水１７校、床上浸水９校、床下浸水５校に及んだ。

その後、住宅が全半壊した地区には、自衛隊の復旧部隊が投入された。福井豪雨から６日目にして、やっと復旧作業が本格化したのである。全国からのボランティアは、延べ６万人に及んだ。見るも無残な家の姿に泣くことしか出来なかった被災者たち。そんな被災者に希望と勇気を与えてくれたのが、ボランティアだった。

参考：「7.18　福井豪雨　報道記録集」　福井新聞社

2「養護教諭サポート隊」結成の経過

福井豪雨から10日、多くの地域や学校が被災する中で、水害に遭遇した子ども達の心身両面の迅速な対応が迫られていた。災害直後の強い恐怖や不安感は、時間の経過とともに身体症状や精神症状となって現われる。

私たちは7月28日、被災状況の把握及び支援体制づくりを行い、「福井県養護教諭サポート隊」を立ち上げた。その経過を報告する。（以下、「養護教諭サポート隊」と記す）

写真：今立町南中山小学校

2「養護教諭サポート隊」結成の経過

県養護教諭部会の役員４名と旧部会長２名が緊急に集まり、被災した児童生徒にどんな支援ができるか、県養護教諭部会としてどんな行動が起こせるかを話し合った。

（１）被災校の状況

福井豪雨による被害を受けた児童生徒のいる学校
（７月２６日現在把握している県内小中学校数）

	小学校	中学校
福井市	１０校	４校
鯖江市	3	1
美山町	2	1
今立町	4	1
池田町	1	1
合　計	２０	8

・　福井県教育庁スポーツ保健課（以下、県スポーツ保健課と記す）及び県義務教育課の担当者と、被災の状況について情報交換を行った。
・　現在学校では、担任の先生等が児童生徒が無事でいるかどうか確認している。その結果、心のケアが必要な児童生徒には、スクールカウンセラーがボランティアで面接や家庭訪問を行う予定である。養護教諭とスクールカウンセラーの支援内容が重ならないように調整したい。

（２）部会としての支援方法についての意見

・　養護教諭としてどんなことができるか、部会として何ができるかを考えて、組織としての活動につなげられたらよい。
・　被災地域の中に場所を確保し、「青空保健室」を開設する。養護教諭が、決められた担当地区に常駐し、連絡を受けて家庭訪問を行う。また、そのことを新聞等で知らせる。
・　被災児童生徒の健康状態を把握するための調査用紙（チェックリスト等）を作成する。（幼稚園、小学校、中学校、高校、養護学校、それぞれの学校用に）
・　今すぐ取り組むこととして、被災校へ保護者向けの保健だよりを作成し、利用してもらうことが考えられる。
・　児童生徒への対応のしかたについての資料（急性ストレス反応、ＰＴＳＤ等について）を作成し、被災校へ届ける。
・　被災校の児童生徒や保健室を支援するために、「サポート隊」を組織して活動する。
・　スクールカウンセラーとの連携をはかる。
・　鯖江市、美山町、今立町・池田町、福井市の中で被災した４ヶ所を拠点校（被災

地域の中でも被害の少なかった学校または近隣校）とし、県スポーツ保健課から被災校へ支援内容を要請してもらう。

（３）実際の活動に向けての具体的な検討

- 被災校では何を求めているのか、子どもたちの実態はどうなのかを現地に出向いて調査する必要があるため、翌日先遣隊として数名の養護教諭を被災地へ派遣する。
- サポート隊に参加できる養護教諭を募集する。
- サポート隊派遣本部を部会長校に置き、派遣に関する連絡調整を部会役員４名が行う。
- 資料作成班をつくる。
- 夏季研修会の班別協議の中に、今回の活動について協議する班を設ける。運営については、旧部会長会に依頼し、参加者は各郡市１名程度、被災地域については希望者を優先する。

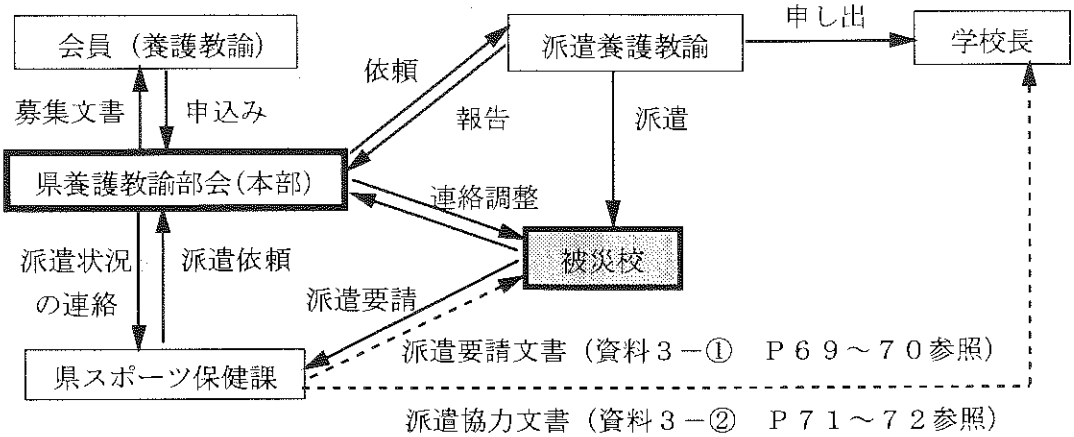
3 派遣システム

急きょ立ち上げた「養護教諭サポート隊」であったが、限られた時間の中で精一杯私たちが作り上げたシステムである。

写真：今立町南中山小学校

3　派遣システム

今回の取り組みについて決定後、「養護教諭サポート隊」派遣について、次のようにシステムの整備を行った。



（１）派遣本部の設置

７月２９日に部会長校保健室（成和中学校）に派遣本部を設置し、同日午後より派遣を開始した。

①　サポート隊の募集について

最初の数日は会員個々に声かけを行いながらの派遣であったが、７月３０日に部会からの文書を各郡市・ブロック理事を通してＦＡＸし、サポート隊の募集について会員へ広く呼びかけた（別紙１、Ｐ６～７）。翌日よりさっそく連絡が入り、合計230名の申し込みが寄せられた。県下一円、遠方からも多くの申し出があり、「養護教諭として何か･･･」という熱い思いと組織力の強さを感じた。

②　日程及び派遣先の連絡調整

派遣の日程や派遣先の決定については部会役員が調整を行い、派遣先の学校と県スポーツ保健課、派遣養護教諭に連絡を行った。同一地区の者が２～３人のグループを組んで行けるよう、申込書の日程を見ながら電話連絡を行った。時間的制約があり、しかも夏季休業中であったため、調整にかなりの困難を要した。

また、派遣養護教諭一人一人がサポート隊の支援内容を理解し、養護教諭としての専門性を生かした活動となるよう、「派遣連絡票」（別紙２、Ｐ８）を作成した。

③　サポート隊終了後の報告について（電話・報告書）

事前情報を持って臨みたいとの意見があり、次のサポート隊への電話連絡を依頼した。さらに本部が派遣状況の把握とその後の調整を図るために、役員への電話連絡と終了後の報告書の提出を依頼した。

（２）被災校からの派遣要請及び各校への派遣依頼

上記システムが円滑に機能するよう、被災校と各学校への文書発送を県スポーツ保健課に依頼した。

別紙１ －１　部会文書

至　急

事　務　連　絡

福井県学校保健会養護教諭部会　会員各位

平成１６年７月３０日

福井県学校保健会養護教諭部会
部　会　長

「福井豪雨」被災児童・生徒への心のケアに係る支援について

この度の福井豪雨により災害を受けられた方々に対し、謹んでお見舞い申し上げます。
県養護教諭部会では、養護教諭の専門性を生かし、被災児童・生徒の健康観察や相談活動などで、心のケアの支援体制づくりのお手伝いをしたいと考えています。現在、美山啓明小学校の学童あずかりのサポートや健康調査票の作成など、すでに活動を始めています。派遣の期間については未定ですが、被災校からの要請がある限り対応させていただきます。
夏季休暇中、公私ともにお忙しいことと思いますが、一人でも多くの方のご協力をお願い致します。

記

１　参加申し込み　８月３日までに申込書を直接担当役員校へＦＡＸで送付下さい。

２　支援内容（今後要請があると考えられる内容）
・家庭訪問に同行し、健康観察や相談活動の支援
・学童保育児の健康管理や精神的なサポート
・登校日の健康調査のまとめや保健室の対応
・被災校養護教諭が家庭訪問等で保健室を空けた時の保健室の対応
・保健室の機能回復のためのお手伝い
・心のケアに関する資料作り　など

※　被災校の養護教諭の方は、遠慮なく小さな事でも申請して下さい。

３　その他
・みなさまからいただいた申込書をもとに、派遣先や人数の調整をします。
前日までに連絡がなかった場合は派遣はありません。
・派遣要請は養護教諭部会の役員より連絡させていただきます。
要請があった方は必ず校長の許可を得てから参加下さい。
・スポーツ保健課より各校の校長宛に依頼文書が出ています。
・服装等については支援の内容で各自考えて下さい。
・弁当、飲み物等については持参して下さい。

＜問い合わせ先＞　福井県学校保健会養護教諭部会（役員）

部　会　長	０９０－○○○○－△△△△
副部会長	０９０－△△△△－○○○○
副部会長	０９０－○○○○－△△△△
副部会長	０９０－△△△△－○○○○

別紙１－２

至急

ＦＡＸ送信票（この用紙のみ送信して下さい。送付状はいりません）

宛先

部　会　長　　FAX(0776-00-0000)・・・坂井・足羽・吉田・勝山・敦賀
副部会長　　FAX(0776-00-0000)・・・福井・三方・大飯
副部会長　　FAX(0778-00-0000)・・・鯖江・丹生・武生・今立・南条
副部会長　　FAX(0776-00-0000)・・・高校・特殊・大野・小浜遠敷

養護教諭サポート隊（派遣養護教諭）　申込書

勤務校	養護教諭
学校名 ＿＿＿＿＿＿	名前 ＿＿＿＿＿＿
電話 ＿＿＿＿＿＿	連絡先（必ず連絡がとれる番号）
FAX ＿＿＿＿＿＿	TEL ＿＿＿＿＿＿

★参加の可能な日に○を付けてください

期日	7/31	8/1
(曜)	(土)	(日)
AM		
PM		

期日	8/2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
(曜)	(月)	(火)	(水)	(木)	(金)	(土)	(日)	(月)	(火)	(水)	(木)	(金)	(土)	(日)
AM														
PM														

期日	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29
(曜)	(月)	(火)	(水)	(木)	(金)	(土)	(日)	(月)	(火)	(水)	(木)	(金)	(土)	(日)
AM														
PM														

8月3日（火）までに上記担当役員校へＦＡＸして下さい。

別紙２　派遣連絡票

先生へ

養護教諭サポート隊　〇〇小学校

日　　時	派遣養護教諭
８月　　日（　　） ８：３０～１６：００	（　　） （　　） （　　）

行き先	〇〇小学校　〇〇町〇〇１－２　電話〇〇〇〇－〇〇－〇〇〇〇 校長　〇〇〇〇先生　　養護教諭　△△△△先生
支援内容	「学童保育児の精神的サポート」 学校に臨時の児童館を開設し、子ども達のお世話をしています。そこで、子ども達を遊ばせながら健康観察及び心の支援活動を行います。（遊び相手，話し相手になる） ＜支援のポイント＞ 〇被災した子どもの心と体のケア（予防的ケア） 被災直後の強い恐怖や不安は、１～２週間の時間の経過とともに、眠れない、食欲がない、頭痛、腹痛などの身体的症状や、口数が少なくなる、ぼんやりしている、多弁で落ち着かなくなるなどの行動となって現れたり、２学期が始まるころになって外傷性ストレス障害（ＰＴＳＤ）となることが懸念されます。現段階で大切なことは、一人一人の子ども達の話をじっくり聞く対応が予防的ケアとして大変重要です。 ※気づいたことや継続観察が必要な児童については，必ず△△先生に引き継いで下さい。
服　装	エプロン持参（必要があれば）　長ズボン、Ｔシャツ、上履きなど
その他	・事前に勤務校の校長先生にお願いし、許可を得てから参加して下さい。（スポーツ保健課から各学校に文書が出ています） ・先生方にお見舞いを申し上げて下さい。また、先生方は大変疲れていますので、なるべく休んでもらって下さい。 ・名札を付ける。（ほけんしつの先生、名前）保健室にあります。 ・遊び道具は学校にもありますが、何か工夫して準備した方が向こうで困らないというご意見がありました。 ・弁当、飲み物持参。 ・引継ノートを工夫して使って下さい。（次の人が参考になるように、保健室にあります）気がかりな子、継続観察が必要な子についても記入して下さい。但し、保管については注意する。 ・地図は準備できませんので地理の詳しい方に聞いて下さい。 ・終了後（１６時～１７時頃）電話で報告をしてください。 子ども達の様子　どんなことをしたか　次の人に伝えたいこと 準備するといいものなど ＜報告先＞　　副部会長　携帯　０９０－〇〇〇〇－△△△△ ＊「非常災害時における子どもの心のケアのために」（文部科学省）を事前に読んで下さい。参考になると思います。

4 支援活動の実際

「養護教諭サポート隊」は、県養護教諭部会の部会長、及び副部会長3名の計4名を中心に、ネットワークを作り支援を開始した。8月20日までの約20日間、延べ108名の養護教諭が被災地に出向いた。

養護教諭の重要な支援のポイントは2つある。1つは直接子ども達と関わって心と体のケアをしていくこと、もう1つは、子どもに対する専門的な支援の程度を見極め、他機関との連携につなぐことである。子ども達といっしょに遊んだり、時間を共有したりしながら、話に耳を傾け健康観察及び心のケア（予防的ケア）の支援を続けた。

FBCテレビ
「夕方いちばんプラス1」
8月2日放映

4　支援活動の実際

（１）被災状況の把握

サポート隊の派遣に先駆け、養護教諭が各学校を巡回し被災状況を把握した。７月２９日午後、一乗小学校に１名、美山地区に５名を派遣し、被災状況を調査すると共にどのような支援が必要か被災校の養護教諭と支援内容の確認を行った。また、巡回調査の他に、電話による被災状況の確認も行った。（４４件）

調査内容は次の通りである。

被災状況把握①　　７月２９日　一乗小学校（１名巡回）

＜一乗小学校＞

被災状況

・　校舎が浸水し、１階の壁には高さ６０～７０㎝くらいまで水につかった跡があった。１階は職員室、保健室や教室が浸水したため、先生方は本や書類、その他の物品を２階教室や体育館に運ぶ作業に追われていた。

・　養護教諭に話を聞くと、この一週間の作業中に、ガラスの破片でけがをするなど、応急処置が必要だったが、保健室の救急薬品は使えない状態だったので、その時に救急箱があるとよかったとのこと。しかし、思わぬ水害のあとの作業におわれ、その時には何が必要なのかを考える余裕すらなかったとの話だった。

・　一乗地区の住民の被災が大きく、児童の家族はその後片付けに追われている。地区のあちこちでブルドーザーなど重機での作業を行っており、児童は戸外で遊ぶと危険なので、遊び場所の確保が必要である。

・　二学期からの学校使用にあたって、職員室や保健室の物品、書類等の整理が必要となってくる。

・　児童の心のケアとして、ストレス発散の場や胸の内を話せる人間関係づくりを考えていかなければならない。

被災状況把握②　　７月２９日　美山地区（５名巡回）

災害時の児童生徒の心のケアへの支援体制作りに向けて（必要と考えられること）

◎心のケアが必要な児童生徒を受け入れる保健室機能の回復

・心のケア（身体面も含んだ）の観察視点パンフレット（保護者教員への配布）

・健康観察表（精神面、身体面）

・災害地の拠点校の保健室を開放し、常時児童生徒の対応ができるようにする

・被災校の養護教諭の活動への支援

　保健室を任せて、安心して家庭訪問へ行ける

　児童を取り巻く家族のケア

・感染予防マニュアル（配布用）　→すぐに使える資料　　ホームページ

・被災校の先生の交代要員‥‥休めない　心の余裕がなく、充分にケアしてあげられない

各校の状況

＜美山中＞

◎まず保健室を、生徒を受け入れられる状態へ

　被災校の養護教諭は、保健室の片づけにかかりきりになれない

・保健室の掃除・・床拭き　壁、床の消毒　器具の消毒、搬入など

・保健室に必要な救援物資

　清潔な水（傷の消毒用）　使い捨てマスク　手袋　体温計　滅菌ガーゼ

　布団　枕　石鹸　湯沸かし（ポット　コンロ）　冷却シート　冷却枕

　冷蔵庫（氷）　休養できるところ　プリペイド携帯（TEL不通）

・環境衛生検査（９月までに）

　電球の掃除　照度　黒板　害虫駆除　水質検査

・臨時健康診断に向けて必要なこと

・健康診断票等　諸帳簿の泥の拭き取りや転記、整理など

＜美山啓明小、下宇坂小＞

○学童保育のサポート

・午前、午後２名ずつ（今のところ）

　保健室の対応をする人、遊ぶ人、子ども達は話がしたい、体を動かしたい

　応援教員のサポート　　他の教員も助かる

＊ボランティアにいくときは　→エプロン（必要に応じて）

名札「保健室の○○先生」　遊ぶもの

行ったらノートに記入、次の人への伝達や養護教諭への伝言など、記録を残す

＊被災地の養護教諭へ　　遠慮せず小さなことでも申請を

（２）サポート隊派遣

①　派遣状況

派遣先　６校	美山町（美山啓明小学校、下宇坂小学校、羽生小学校） 今立町（南中山小学校、服間小学校） 福井市（一乗小学校）
派遣内容	○学童保育での児童の健康観察と相談活動 ○保護者との相談活動 ○保健室機能回復のための支援
派遣期間 人数	７月２９日～８月２０日　　１７日間 派遣人数　１０８名

合計１０８名

	美山啓明小 8:30～16:00 ２～３人体制	下宇坂小 9:00～15:00 ２人体制	羽生小 9:00～13:00 ２人体制	南中山小 9:30～11:30 ３人体制	一乗小 9:00～12:00 ２人体制
7/29(木)	美山地区　巡回　5				巡回　1
	(6)　2				
30(金)	(21)　3				
31(土)	(10)　3	(3)　4			
8/ 1(日)	(10)　2	(2)　2			
2(月)	(16)　2	3	(9)　2		
3(火)	(32)　3	(19)　3	(9)　2		
4(水)	(29)　3	(19)　2	(12)　2		
5(木)	(32)　3	(23)　2	(4)　2		
6(金)	(27)　4	(20)　2	(16)　2		
7(土)	(0)　2		(0)　2		
8(日)			(0)　2		
9(月)	(11)　3	(20)　4	(0)　2		
10(火)	(15)　3	2		(3)　3	
11(水)	(22)　3	(13)　4		(3)　3	
12(木)	(10)　4	(12)　4		(2)　3	(0)　2
					服間小学校 9:30～11:30
19(木)					(3)　1
20(金)					(5)　1
	４５	３２	１６	９	５

（　）内は学童保育児童数　　計１０７名　＋部会長（巡回）

②派遣報告及び連絡

ア　サポート隊間での報告及び連絡

○　「引き継ぎノート」の活用

各学校に引き継ぎノートを準備し、児童の様子などを次のサポート隊やその学校の養護教諭に引き継いだ。この引き継ぎノートの活用でサポート隊同士の連携と児童の継続観察が可能となり、より効果的な活動につなぐことができた。

引き継ぎノートより抜粋　　**＜美山啓明小学校＞**

○月○日（午前・午後）	**サポート隊 3名**
児童数（２９名）	**開放教室**（　会議室　体育館　保健室　）
支援内容	学校に臨時の児童館を開設し学童保育を行っている。そこに来た児童の健康観察及び心の支援活動を行う（遊びを通して心に寄り添う）
日程	８：３０～１０：００　会議室で学習（児童と心の触れ合い） １０：００～１０：３０　おやつ １０：３０～１２：００　会議室で遊ぶ （あやとり、トランプ、紙芝居、パズル等） １２：００～１２：４０　昼食（児童とともに） １２：４０～１６：００　会議室　体育館で遊ぶ（折り紙遊び） 保健室でビデオ、本読み １６：００　バスにて帰宅

気づいた点

・　○○さんは９時４５分頃より机の上で辛そうにしていた。保健室で横にさせて、本人の希望で本を２冊読む。眠いと言っていたが寝ることはなかった。トイレの回数が多く、１５分で行くこともあった。また、人に対しての言葉使いが荒く気になる。

・　グループ遊びが出来る子もいるが、大人と１対１でしか遊べない子も数名いる。３人体制が必要。

・　子ども達は元気に遊びまわっていた。今日は折り紙が大流行だった。

・　被災した子で、弁当の準備ができないため、パンを買って持ってきた子がいた。カウンセラーの先生が対応したが、今後もそのような子がいるかもしれないので気をつけてほしい。

＜下宇坂小学校＞　当校養護教諭作成の様式

臨時児童館　心のカード

月　　日 (　　)	担当者名	学校名

☆心のケアが必要だと感じられた子がいましたら教えてください。

名前（あだなでも）	性別	児童の様子など
		※２４名の児童が床上・床下浸水などの災害を受けているが、臨時児童館には参加していないため、あまり記載がなかった。

☆その他　何か気がかりなこと、お気づきのことなどあれば、教えてください。

※数日分をまとめて記載

8/1（土）　給食準備室の冷蔵庫に、アイスキャンデーが作ってあります。２日に食べてください。しゃぼん玉遊びをしました。ハンガー、あみ、洗剤を置いていきます。たらいを借りて遊んでください。

8/5（木）　児童は初対面から人なつこく、こちらも気軽に接することができた。また、体育館で遊んで汗をかいても、タオルや着替えがないので配慮がいる。
昼食後に歯みがきなどを一緒にしてもよいと思った。ここの先生方が毎日では精神的にも肉体的にも大変だと思った。
遊び道具を持参するとよかった。

8/6（金）　どの子も人なつこく、こちらもとても楽しく過ごせた。子ども達も工夫して遊んでいたが、人数が多い時には、ドッチボール大会など、みんなで 盛り上がれる企画をやるとよいと思う。大きい子が小さい子のめんどうをみている姿がとてもほほ笑ましかった。

8/10（火）　当校養護教諭の健康調査の集計を手伝った。子ども達の心の様子の一端がみられ、健康調査の必要性を感じた。

8/11（水）　子ども達が思い切り遊べるスペースがなく、部屋の中の遊び道具では物足りない様子だった。外で自転車などを乗りまわして遊べる環境に早くなり、ストレス発散ができるとよいと思った。

本日は本当にありがとうございました。下宇坂小　養護教諭　○○○○

＜羽生小学校＞　その１

○月○日9:00～13:00　　**サポート隊　２　名**
児童数（　９名）　　**開放教室**（　２階の教室　　プール）
支援内容　学校に臨時の児童館を開設し学童保育を行っている。そこに来た児童の健康観察及び心の支援活動を行う（遊びを通して心に寄り添う）
今日の流れ 校長先生へ挨拶、教頭先生と簡単な打ち合わせ ２階で子ども達と過ごす　　・８～９時　学習 ・９時～　折り紙、絵（自由）、トランプ、ハンカチ落とし ・昼食を一緒に　　・１時～　子どもはプールなので終了
申し送り ・　Ａ君　ムードメーカー　スキンシップをしてくる Ｂ君　よくしゃべる　洪水でお気に入りの網が流されたと話す Ｃ子　しっかりもの　大きい子とよく遊ぶ　よく意見を言う Ｄ子　マイペース　几帳面な折り紙＋オリジナル　初めは黙っている Ｅ子　初めはおとなしかったが次第に話す　弟を気にかけている感じ Ｆ子　ほとんどしゃべらず　一人で創作折り紙をするが慣れると一緒に遊ぶ Ｇ子　はっきりとした感じ Ｈ子　３姉妹の上で落ち着いた感じ Ｉ子　トランプ遊びを仕切っていた　しっかりした感じ ・　折り紙が好きな子がいて長時間ずっとやっていた。後半になって子ども達が自発的にトランプを始め、次にハンカチ落としをして盛り上がった。一人だけ（○○さん）中に入らず折り紙をしていたので付いていた。子ども達も最初は他校の先生ということで緊張していたが、一緒に遊んで次第にうちとけることが出来た。とてもかわいい子ども達ばかりで、一緒にプールへ入りたい気持ちであった。 ・　健康観察は遊んでいる途中に一人一人行い、夜眠れなかった子（３人）と時々腹痛（３人）が気になった。古い傷を見せてくれた子もいた。 ・　一緒にすごして遊ぶことが主な活動で、こちらからあまり仕切らず、子どもの遊びに付き合っていた。しかし、毎日折り紙という訳にもいかないので、一つぐらい何か遊び道具を準備するといいと思う。昼までの付き合いなので、仲良くなった頃にさよならです。小さい子には手をかけてください。

＜羽生小学校＞　その２

○月○日9:00～13:00	**サポート隊**　２　名
児童数（　１２名）	**開放教室**（　２階の教室　プール）
支援内容　学校に臨時の児童館を開設し学童保育を行っている。そこに来た児童の健康観察及び心の支援活動を行う（遊びを通して心に寄り添う）	

今日の流れ

校長先生へ挨拶、簡単な打ち合わせ
教頭先生の案内で２階の教室へ、自己紹介
・８～１０時　学習や色塗りの間、健康観察を行う
・１０時～　手話であいさつ、折り紙遊びなど
・昼食を一緒に
・１時～　子どもはプールなので終了

申し送り

・　１０時以降、手話の挨拶（おはよう、こんにちは、こんばんは）を一緒にやってみる。手話コーラス「世界に一つだけの花」「世界が一つになるまで」をテープに合わせてやる。皆歌詞を知っていてしっかりとやってくれた。

・　折り紙遊びの時や昼食時に被災時の状況を聞いてみた。「水がついた時は怖かった」と表情をかたくし話してくれたが、元気に遊んでいた。最後に一人一人と握手をして別れた。

・　幼稚園児同士のトラブルがあった。一人が新聞紙の丸めたものでもう一人の左目付近をたたき、「痛い」と姉と訴えてきた。謝るよう促すが謝らないので「手話の友達は互いの手を組むんだよ」とやらせたところ、二人は素直に手を組み仲直りをした。幼稚園の先生に申し送る。

・　どの子も素直で元気に挨拶ができ、とても気持ちよく接することができた。

・　昼食時、被災したにもかかわらず、子ども達に愛情のこもった弁当を作っている保護者の姿を思い浮かべ、胸が一杯になった。

＜南中山小学校＞　その１

○月○日　午前　　**サポート隊3名**	
来室者　**児童**３名　（児童に付き添って来た祖母１名）　　**場所**　保健室	
支援内容　保健室を開放し児童の健康観察および相談活動を行う	

内容

- ８：３０よりサポート隊と被災校養護教諭とで、簡単な打ち合わせの後、校長先生に挨拶
- 児童との遊び（ふうせんで動物等を作る）
- 児童の祖母の話を聞き、アドバイスする
- 泥で汚れた発育記録ファイルの転記

気づいた点

- 被災を受けた家庭と受けなかった家庭との家族の気持ちが、時間の経過とともに子どもに影響がでるのではないかと危惧する。子どもだけでなく、家庭事情もふまえたケアが必要とされる。

- 学校、保健室も被災したので、発育の記録ファイルなどが泥に浸かった。その記録ファイルの転記を行ったが、かなり手間がかかるので、サポート隊の人数を増やす必要があると感じた。子ども達も話しかけるとかえってくるので、役割分担してもよいと思った。

- 紙芝居「ファジーの気持ち」を二学期になってクラスで使用して欲しい。
（少し難しいので解説が必要であると思う）

＜南中山小学校＞　その２

○月○日　午前　　サポート隊３名	
来室者　児童３名	**場所**　保健室
支援内容　保健室を開放し児童の健康観察および相談活動を行う	

内容

・　８：３０よりサポート隊と被災校養護教諭とで、簡単な打ち合わせの後、校長先生に挨拶
・　宿題を持ってきた児童の指導
・　児童との遊び
　○手紙を書いて、シャツやハート、バラを折る（友人やお母さんへ）
　○ふうせんで動物等を作ったり、飛ばして遊ぶ
　○トランプやゴム跳び等
・　泥で汚れた発育記録ファイルの転記

気づいた点

・　発育記録ファイルの転記に手間がかかるので、もう一度事務の補助に来たいと思った。

・　来室した児童は、私たちに「明日も来る？」と聞いてきた。昨日と今日と来て楽しかったようだ。地区の人たちが遠慮深いそうなので、期間を長くとるとか子ども達が誘い合うと多く集まるのではないかと感じた。

・　被災校の養護教諭が大変なので、サポート隊の人数を増やして、保健室復旧のための支援も必要と感じた。

・　今後心のケアを必要とする子ども達が増えてくると感じた。その子ども達を抱える保護者への対応はもちろんのこと、被災校養護教諭にも心のケアが必要だと感じた。

○　サポート隊終了後の報告（電話・報告書）

サポート隊の声として、事前に情報を持って望みたいとの意見が多かったので、サポート隊終了後、次のサポート隊への電話連絡を依頼した。また、支援状況を把握し、派遣人数の調整等を行うため、役員への電話連絡も依頼した。

さらに、サポート隊参加者全員に下記の報告書の提出を依頼し、今回の活動の記録とした。（今後の災害時の支援活動の参考にするために）

ＦＡＸ報告様式

養護教諭様

この度はサポート隊にご協力いただき、ありがとうございました。派遣先で気付いたことや感想をお聞かせください。特に、被災地域の子ども達の心と体へのケアについて、子どもの様子で気になったことや今後に生かせることなどを記入し、○○小学校△△△△まで返送してください。よろしくお願いします。

○○小学校ＦＡＸ番号　□□□－○○－××××

○○小学校　△△△△宛

学　校　名

養護教諭名

派遣日時　　月　　日（　　）　時　　分～　時　　分

派　遣　先

○子ども達の様子（気になった児童など）

○支援内容（心のケアとして心がけたこと、支援できたこと）

○その他感想（自由にお書きください）

○　県スポーツ保健課への連絡

活動が終了したサポート隊員は、直ちに本部（役員）へ子ども達の様子や支援内容について報告し、それを受けて、県スポーツ保健課へ１日の活動内容についてまとめて連絡した。内容は以下の通りである。

スポーツ保健課への連絡

期　日 (派遣養護教諭数)	内　　容	派遣 養護教諭	支援活動要旨
７／２９ （木） 午後 （計８名）	・美山地区被災状況把握 ５名	○○○○ ５名	別紙報告書　（Ｐ９　参照）
	・一乗小被災状況把握 １名	１名	別紙報告書　（Ｐ１０　参照）
	・学童保育児のサポート **美山啓明小　　午後**	２名	・　児童５～６名 ・　エプロン、遊び道具を持参できるとよい。名札（保健室の先生、名前）をつける。 ・　最初の日だったので、児童も自分も不慣れで、終わり頃やっと慣れてきた。 ・　体を動かすことが必要と思い、ペットボトルボーリングを行った。「普段口数の少ない子が大はしゃぎをする」という変化が見られた。（啓明の先生より）
７／３０ （金） （計６名）	・学童保育児のサポート **美山啓明小　　午前**	３名	・　児童 ＡＭ１７名、 ＰＭ２１名 ・　喜んでお絵かきをしていた。 ・　話し始めるとやまない子もいて、よく話を聞く。
	午後	３名	・　午後からカウンセラーが入る。 ・　多動の子１名。 （役員準備：引き継ぎノート、画用紙、クレヨン、折り紙、マジック等の筆記用具）
７／３１ （土）	・学童保育児のサポート **美山啓明小　　午前**	２名	・　児童７名＋幼児３名 ・　保健室開放

期　日 (派遣養護教諭数)	内　　容	派遣 養護教諭	支　援　活　動　要　旨
7／31 (土) つづき (計9名)	午後	3名	・　10時まで学習時間 ・　遊び…楽器（音楽室）、大縄跳び（体育館）、ゲーム（パソコン室）、トランプ ・　○○先生より要観察児童1名連絡を受け、注意深く観察した。 ・　災害について話す子もいて、ゆっくり話を聞く。 （役員準備：名札）
	・学童保育児のサポート **下宇坂小**　午前	2名	・　子ども達がぼうっとしていた。 ・　アトピーが悪化した子1名（プールに入れなくて残念だった） ・　先生方が私たちに気を遣いすぎる。
	午後	2名	・　午後は児童3名 ・　特に災害の大きい地区の子はいなかった。校庭のゴミやプールが使えないことへの不満あり。
8／1 (日) (計8名)	・学童保育児のサポート **美山啓明小**　午前	2名	・　児童7名＋幼児3名 ・　紙芝居、本の読み聞かせ、トランプ、ゲーム、ドッジボールなどの遊びを通して児童の観察を行う。全身を動かす遊びを意識的に取り入れた。
	午後	2名	・　家の後ろの土砂が崩れて大変だったなど、被害についても話してくれた。話を聞くことしかできなかった。 ・　先生方の疲れやストレスの極限状態。当番の先生にはなるべく休んでもらう。 ・　気になる子2名…多動ぎみで落ち着きのない子など。
	・学童保育児のサポート **下宇坂小**　午前	2名	・　児童2名。休日で家に保護者がいるからか利用が少なかった。
	午後	2名	・　ほこりや泥が乾いて風と一緒に舞っているので、マスクの使用が必要。

期　日 (派遣養護教諭数)	内　　容	派遣 養護教諭	支援活動要旨
8／1 つづき			・　被災児童だけでなく、広く学童保育を地域全体に呼びかけているので大変である。 ・　楽しかったという気持ちを持ってもらいたいと思い、シャボン玉やアイスづくりなど、材料を考えて持参した。 ・　午後は児童１名になり、当番の先生で対応できるため帰る。
8／2 (月) (計12名)	・学童保育児のサポート **美山啓明小**　　**午前**	2名	・　児童１６名 ・　午前にＦＢＣの取材が入る。 ・　午前中１０時まで学習、家での様子などを聞いた。(池がなくなり鯉が流されたと話してくれた。ゆっくり話を聞けてよかった。) ・　ボーリング大会
	午後	2名	・　午後はバレーボール、ゲーム、トランプ遊び ・　気になる子･･･迎えの母親に甘え、母親は「今までこんなことはなかったのに」と話す。幼児がえりか？経過観察が必要。
	・学童保育児のサポート **下宇坂小**　　**午前**	2名	・　４年の女子でもおんぶしてくる子がいた。
	午後	2名	・　橋が流されたなど、災害の様子をよく話していた。
	・学童保育児のサポート **羽生小**　　**午前**	2名	・　児童９名 ・　内容は学童保育（7/31より開始）のサポート ・　時間：９～１３時（１３～１５時はプール)
	午後	2名	・　弁当は子ども達と話しながら食べた。 ・　引き継ぎノートの保管場所：職員室の養護教諭の机上。

期　日 (派遣養護教諭数)	内　　容	派遣 養護教諭	支援活動要旨
8／3 (火) (計12名)	・学童保育児のサポート **美山啓明小**　**午前** **午後**	2名 2名	・　幼児6名、児童26名、計32名 ・　園児は幼稚園の先生が対応。(昼寝) ・　昼は保育園で紙芝居をしていたのでそこに半数が参加した。 ・　災害や家の様子などを話してくれた。 ・　2時頃、遊びにも飽きて帰りたいと言う子も出てきたが、また元気が出てきて遊んでいた。
	・学童保育児のサポート **下宇坂小**　**午前** **午後**	2名 2名	・　児童18～19名 ・　10時まで学習やお手伝い。 ・　工作・パソコン・ボール遊びなど好きな遊びを選ばせた。 ・　下宇坂小の先生が3名。 ・　水害にあっていない子が多かったので、元気そうであった。
	・学童保育児のサポート **羽生小**　**午前** **午後**	2名 2名	・　児童9名 ・　遊びを通して観察‥気になる子はいなかった。災害を見ていた子もいた。 ・　美山町の教育長が巡回。 ・　エプロンはなくてもよい。
8／4 (水) (計14名)	・学童保育児のサポート **美山啓明小**　**午前** **午後**	3名 3名	・　児童29名 ・　カウンセラー3名（会議室で先生との打ち合わせ) ・　遊びの相手をしながら話を聞く。 ・　気になる子…落ち着きのない子（災害が原因かどうかは不明）大人としか遊べない子
	・学童保育児のサポート **下宇坂小**　**午前** **午後**	2名 2名	・　児童19名 ・　学習後、体育館で隠れ鬼ごっこ・ドッジボール・バレー・縄跳びなど ・　午前中下宇坂小の先生方は会議。 ・　学童保育に来れる子は、災害がまだ

期　日 (派遣養護教諭数)	内　　容	派遣 養護教諭	支援活動要旨
8／4 つづき			小さい地区の子ども達。ひどい地区の子は生活ができないので、母親の実家などにあずけられている。その子達が心配である。 ・　一緒に遊べない子もいた。
	・学童保育児のサポート **羽生小**　　**午前**	2名	・　幼児4名、児童8名、計12名 ・　学習後手話で挨拶、「世界にひとつだけの花」を手話で合唱した。 ・　好きな遊び（トランプ・折り紙・おはじきなど）をしながら子どもの話に耳を傾ける。怖かったこと、おばあちゃんの自転車が流された、お米が流されたことなどを話してくれた。 ・　災害のひどい地区の子もいたが元気に遊んでいた。 ・　手作り弁当が愛情一杯で感激した。（母親も大変なのに） ・　けんかもあり、担任に申し送る。
	午後	2名	
8／5 （木） （計14名）	・学童保育児のサポート **美山啓明小**　　**午前**	3名	・　児童32～33名 ・　ゲームや遊びを通して子ども達の観察を行った。 ・　気になる子…注意深くかかわろうとすると、それ以上入ってきて欲しくないという態度が見られた子、攻撃的な態度の子。 ・　体育館で遊ぶとかなり汗をかくので、飲み物が必要（脱水症への配慮）。 ・　一日だけのかかわりでどれだけ心のサポートができるか難しいと感じた。
	午後	3名	
	・学童保育児のサポート **下宇坂小**　　**午前**	2名	・　児童22～23名 ・　ぬり絵や工作、体育館での遊びを通して児童の観察を行った。 ・　慣れるまでに少し時間がかかった。 ・　まだ外で遊べないのでビデオなども
	午後	2名	

期　日 (派遣養護教諭数)	内　　容	派遣 養護教諭	支　援　活　動　要　旨
8／5 つづき			準備すると良い。 ・　下宇坂の先生が私たちに気を遣いすぎる。 ・　気になる子はいたが、災害によるものかどうかわからず。
	・学童保育児のサポート **羽生小**　　**午前**	2名	・　児童4名（男子） ・　元気に遊んでいた。落ち込んでいる様子は見られなかった。
	午後	2名	・「昨日来た先生は○○を持って来た」と言われ、工夫して遊び道具を持って行った方が良い。 ・　気分にむらがあり、だっこなど甘えてくる様子が見られた。（十分甘えさせる必要あり） ・　スキンシップをはかるため、指相撲や腕相撲で遊んだ。 ・　4人とも食欲旺盛。 ・　養護教諭の○○先生、2時頃出勤。ご自宅が被災されているので、大変疲れている様子。 ・　前日に行った人から情報を得られると良かった。
8／6 （金） （計14名）	・学童保育児のサポート **美山啓明小**　　**午前**	3名	・　児童27名 ・　児童の様子は落ち着いてきている。 ・　午前中は児童演奏のバイオリンミニ演奏会。みんな静かに聞き入っていた。
	午後	3名	・　昨日よりプール開放、午後2名を除いてプールに入る。2名はシャボン玉などで遊ぶ。 ・　プール後リズム体操を行った。 ・　自分の家の風呂が全部だめになったと被災時の様子を話してくれた。現在福井の祖父母宅より児童館へ通っている。目の前で大きな川が一杯になり、すべてのものが水につかり、自宅の一

期　日 (派遣養護教諭数)	内　　容	派遣 養護教諭	支援活動要旨
8／6 つづき			階のものが全部流れていった現実を、この幼い子ども達がどのように記憶にとどめたのか。学校にいる時は元気だが、一人の時や夜寝る時など不安が膨らんでくると思う。 ・　気になる子…家庭的なトラブルで不安定な子１名。
	・学童保育児のサポート **下宇坂小**　午前 午後	２名 ２名	・　児童約２０名 ・　ペーパークラフト、粘土、ドッジボール、ビデオなどで遊んだ。 ・　児童も今日は何してくれるの？と楽しみにしている様子。 ・　気になる子･･･甘えてくる子。
	・学童保育児のサポート **羽生小**　午前 午後	２名 ２名	・　児童１６名 ・　引き継ぎノートの内容が次の人に事前に伝わるとよい。 ・　聞いていた人数より多く、準備した遊びもすぐに飽きてしまったので、遊びの工夫が大変だった。 ・　やんちゃで手のかかる子１名…なるべく手をかけるようにした。 ・　気になる子…カーテンにくるまっていたり表情の少し暗い子がいた。経過観察が必要。ノートに記入。
8／7 (土) (計８名)	・学童保育児のサポート **美山啓明小**　午前 午後	２名 ２名	・　９時の段階で参加児童なし。 ・　土、日の派遣不要と本部に連絡が入り、８／７午後と８／８のサポート隊に、キャンセルの連絡を入れる。
	・学童保育児のサポート **羽生小**　午前 午後	２名 ２名	・　参加児童なしのため、午後２時頃帰る。

期　日 (派遣養護教諭数)	内　　容	派遣 養護教諭	支援活動要旨
８／８ （日）	・学童保育児のサポート **美山啓明小**　**午前** **午後**	２名 ２名	
	・学童保育児のサポート **羽生小**　**午前** **午後**	２名 ２名	・　参加児童なし。 ・　土、日はサポート隊の申請をしていないと本部役員に連絡が入る。 ・　「今日はどんな先生？」と子ども達は楽しみにしている。羽生の先生はこのサポート隊の活動で大変助かっていると感謝された。（教頭先生より）
８／９ （月） （計14名）	・学童保育児のサポート **美山啓明小**　**午前** ８：３０～１６：００ **午後**	３名 ３名	・　児童１０数名 ・　午前中は、バドミントンやボールを使っての遊びを通して、子ども達とふれあった。 ・　午後は室内ゲームなどをした。
	・学童保育児のサポート **下宇坂小**　**午前** ９：００～１５：００ **午後**	２名 ２名	・　児童ＡＭ１７名、ＰＭ２０名前後 ・　午前中は体育館が使用不可（美山中学校のバレー部が練習）なので幼稚園（幼稚園の先生と）の遊戯室でハンカチ落としなどを行った。その他あやとり、お手玉、ゲーム、紙芝居など。年齢の幅が広いので遊ばせ方も難しい。 ・　遊びを通して、児童の健康観察を行った。 ・　午後は体育館で大縄跳び、かくれんぼ、鬼ごっこ、池で遊ぶ。 ・　けんかもなく、人なつこい子が多いが、我慢をしている様子も見受けられた。 ・　高学年の子でスキンシップを求めてくる子がいて少し気になる。日頃の様子が分からないので何とも言えないが、継続観察が必要。

期　日 (派遣養護教諭数)	内　　容	派遣 養護教諭	支援活動要旨
8／9 つづき	・学童保育児のサポート **羽生小**　　**午前** ９：００～１３：００ **午後**	２名 ２名	・　参加児童なし。１０：３０頃まで校長先生が私たちの相手をして下さり、申し訳なかった。 ・　養護教諭の○○先生も勤務。 ・　児童が来ない日は、美山中学校の保健室復旧の手伝いをしてはどうか。
8／10 (火) (計11名)	・学童保育児のサポート **美山啓明小**　　**午前** ８：３０～１６：００ **午後**	３名 ３名	・　児童約２０名 ・　１０時まで学習、その後遊びを通して児童の健康観察を行った。 ・　午後は３名以外プールに入り、また最後戻って来た。 ・　○○先生からの連絡と引き継ぎノートより、問題のある子を把握して臨めたのでよく観察できた。 ・　集団の遊びの輪に入れない女児（被災児）と１対１で遊んだ。時折笑顔が見られた。また、被災後初めて被災した時の様子を本人の口から聞くことができた。観察が必要。
	・学童保育児のサポート **下宇坂小**　　**午後** １３：００～１５：００	２名	・　児童１名（急きょ、午前中が全校登校日になった） ・　全校対象のアンケート集計を手伝った。
	・来室児童及び保護者のサポート **南中山小**　　**午前** ９：３０～１１：３０	３名	・　児童３名（床上浸水１名、床下浸水２名） ・　床上浸水の子は元気に見えた。床下浸水の子はハイテンションで落ち着きがない。（日頃から見ている養護教諭の目にもそう見える） ・　児童と一緒に来室した祖母の話を聞きアドバイスを行った。 上の子は怖かったと言うが、下の子は元気…現在何ともない子も１・２ヶ月後になって症状が出る場合があること

期　日 (派遣養護教諭数)	内　　容	派遣 養護教諭	支援活動要旨
8／10 つづき			をアドバイスし、どの子も注意深く見守るようお願いした。 ・　祖母の話より、被災に遭った家と遭わなかった家との溝の深さを感じた。その大人達の腹立たしさが、子ども達に影響しないか心配である。長期観察の必要性を感じた。 ・　水に濡れた発育記録ファイルを転記した。
8／11 (水) (計13名)	・学童保育児のサポート **美山啓明小**　　**午前** 8：30～16：00 **午後**	3名 ---------- 3名	・　児童AM15名、PM22名 ・　いろいろな遊びを通して児童の体と心の状態を観察した。 ・　気になる子…蹴るなど、少し暴力的な行動をとる子。(継続観察要で引き継いでいる児童) なるべく多くかかわりを持つようにした。 ・　啓明小の先生常時2名。
	・学童保育児のサポート **下宇坂小**　　**午前** 9：00～15：00 **午後**	2名 ---------- 2名	・　児童13名 ・　遊びを通して観察を続けた。児童は素直で元気で、特別気になる子はいないように見えた。 ・　室内の生活を余儀なくされているので、それがストレスにならないか心配である。
	・来室児童のサポート ・保健室の機能回復 **南中山小**　　**午前** 9：30～11：30	3名	・　児童3名 ・　子ども達はハイテンションで活動的だった。子ども達自身も今日はテンション高いんやと言っていた。災害の影響か？ ・　児童が帰ってからは、保健室復旧に向けての作業を行った。子どもの心のケアのためにも早急的な保健室の機能回復が必要である 。 ・　泥で汚れた発育記録ファイルの転記

期　日 (派遣養護教諭数)	内　　容	派遣 養護教諭	支援活動要旨
8／11 つづき			を行った。 ・　子どもを支援するサポート隊と保健室機能回復のためのサポート隊が必要である。
8／12 (木) (計13名)	・学童保育児のサポート **美山啓明小　　午前** 8：30～16：00 **午後**	2名 ---------- 2名	・　児童約10名 ・　今までの引き継ぎで名前の挙がっていた児童は、担任の先生がいたので落ち着いているように見えた。 ・　チック症状ではないかと初日のサポート隊より連絡を受けたと、校長先生より伺い、注意深く観察したが今日は症状が見られなかった。 ・　気になる子…2人姉妹の姉に軽い指吸いが見られた。(ビデオ視聴時) 観察が必要である。 ・　1年女児…乱暴な行動があり、悲観的な話ばかりする子が気になった。スキンシップをしたり、話をゆっくり聞くようにした。 ・　友達の輪に入れない子に対しては、最初1対1で相手をし、帰る頃にグループの中で遊べるよう配慮を行った。
	・来室児童のサポート ・保健室の機能回復 **南中山小学校　　午前** 9：30～11：30	3名	・　児童2名 ・　1名は普段から注意を要する児童。 ・　子どもの方から話しかけてきて、かまって欲しい様子が見られた。 ・　発育記録ファイルの転記を行った。
	・保健室の機能回復 **一乗小学校　　午前** 9：00～12：00 (13：00終了)	2名	・　心のケアを必要とする児童は今のところいないが (スクールカウンセラーの報告にもあり)、今後児童の心身の変化を見守る必要がある。 ・　学校が被災しており、現在は一階の床張り替えなどの工事中。保健室も水が入り、現品支給のベッドや戸棚など

期　日 (派遣養護教諭数)	内　　容	派遣 養護教諭	支援活動要旨
8／12 つづき			が今後入る予定。保健室機能の回復に向けて流出書類の点検・補充を行った。 ・　児童の実態把握（心のケアを含む）のためのチェックリストの検討を行った。 ・　健康診断票は無事。 ・　臨時健康診断や環境衛生検査などの計画も今後必要である。 ・　まだまだサポート隊でできることがたくさんある。
	・学童保育児のサポート **下宇坂小**　　**午前** ９：００～１５：００ **午後**	２名 ---------- ２名	・　児童１２名 ・　学童保育は１３日で終了。 ・　学校の外も一応きれいになったので、戸外での水遊び、シャボン玉遊びを取り入れた。 ・　言葉の気になる子もいたが、子ども達も先生方も落ち着いてきているという印象である。
8／19 （木） （計１名）	・保護者との相談活動 ・児童との学習会 **服間小**　　**午前** ９：３０～１１：３０	１名	・　児童３名、後で保護者も来校。 ・　前日の登校日に、養護教諭部会作成の「自分を知ろうチェックリスト」を用いて、児童の心身の健康状況を把握していた。○の多い児童への対応について、スクールカウンセラーとの連携を考える。
8／20 （金） （計１名）	・保護者との相談活動 ・児童との学習会 **服間小**　　**午前** ９：３０～１１：３０	１名	・　児童５名 ・　１０時まで学習 ・　その後、キャッチボールなど体を動かし一緒に遊ぶことで次第にうちとけた。楽しい時間が持てるよう心がけた。 ・　担任から「昨日と今日では顔が違い、良い顔になっている。」と言われ、楽しく体を動かすことが心のケアにつながると感じた。

（３）支援活動の感想

①　サポート隊としての感想

サポート隊として各学校に出向いた養護教諭に支援後の報告を依頼した。サポート直後にも電話でその日の報告をしてもらったが、少し時間をおいて支援したことをふり返ってみることで、子ども達の様子や心のケアについて再考できたと思う。

以下生の声を①子ども達の様子（気になった児童など）②支援内容（心のケアとして心がけたこと）③その他感想（自由にお書きください）の項目に分けて報告してもらった。

【７月２９日】

○　子ども達の様子

５名参加。音楽室で楽器を使って遊んでいた。その後、保健室でビデオを見ていた。おやつの後、ペットボトルでボーリングをして遊んだところ、とても楽しそうに参加していた。今日は５名ともおとなしく、子ども達の表情やしぐさで特に気になったことはなかった。

○　支援内容

ビデオを見ている時は、子ども達と同じソファーに座り、１人ぼっちで座る子がいないよう配慮した。じっとしていることが多かったので、ペットボトルでボーリングをつくり、身体を使って遊ぶよう配慮した。

○　その他感想

子ども達と慣れるには、時間を要した。 自分がすぐ簡単にできる遊びなどをいろいろ準備していくことが必要。

【７月３０日】

○　子ども達の様子

皆、一見元気そうではあるが、「落ち着かない」とか「言葉が少ない」など、やはり心の傷を受けているだろうと感じた。特に１年生の女の子がひとりポツンと言葉少なく表情もあまりなく心配だなあと感じた。同じ学年の子が何人かいるともっと気持ちも和らぐだろう。

○　支援内容

面識がないので、最初は意図的にいろいろと声かけをして、少しでも「楽しい」と思ってもらえる時間を持ちたいと思って接した。子ども達に笑顔が見られるように…を、まずは心がけた。後半になって、ようやくポツリポツリと話をしてくれる子もでてきた。１・２年生の子には本の読み聞かせが一番良かったと思う。

【７月３１日】

○　子ども達の様子

最初は、慣れていなかったためか、表情が暗い印象を受けた。話しかけても返答が言葉少なだったが、動きを伴った遊びをしてから心を開いてきて表情も明るくなって

きた。流された物について話していた女の子がいた。不安や恐れの気持ちを受容しながらじっくり話を聞く。しかし２学期になってからが心配である。

○　支援内容

遊びたいことをそのまま受け入れて活動させるように心がけた。ゲーム的な遊びの方が、心のストレスを発散できるようだ。但し、一方的に“負けてばかり”にならないよう配慮した。話してくる内容については、今日は詳しく状況を聞かず、子どもがあるがままの気持ちを受容することに努めた。

○　その他感想

「また、明日もくる！」と言ってくれたことは、その日の我々の支援活動に満足してくれたからだろう。

○　子ども達の様子

参加児童は４名だった。一人につくと一人が淋しがり、家族といるようにはいかず、対応が難しい。アトピーの児童がいて、ほこりのせいなどもあり、ひどくなっているときく。

○　支援内容

ただ、遊びとか時間を費やすだけでなく、私たち支援者のできる範囲で体を動かしたり、工作をしたりしながら子ども達を見守る。支援者の態度も、いろいろとその場で考えていかなければいけないと実感する。

○　その他感想

先生方のケアの必要性も感じた。

【８月１日】

○　子ども達の様子

被災にあった児童ではなく（広く学童保育を地域全体に呼びかけているということで）、自宅に保護者がいる子も利用していた。特に気がかりな児童はいなかった。

○　支援内容

少しでも子どもが楽しかったという気持ちを持ってもらいたいと思い、しゃぼん玉（魚の網、ハンガー、ペットボトル）、アイスづくりなど、材料を考えて持参した。ビデオなども少しあるとよいと思った。（学校用の教育ビデオはたくさんあったが）

○　その他感想

日曜日で自宅に保護者がいるせいか、午前２名、午後２名のみの利用だった。平日利用は、多数いるとのこと。（１５～２０名ぐらい）

ほこりや泥が乾いて風といっしょに舞っているので、マスクの使用が必要だった。

【８月２日】

○　子ども達の様子

幼稚園児から小学６年生までの児童１６名が登校してきていた。それぞれ学習をしたりバレーボールをしたり、ゲームをして一日を過ごした。

○　支援内容

子ども達は、災害時の様子や自分の池の鯉がいなくなってさびしい様子を話してくれた。心にひっかかっている事をゆっくり聞いてあげられたことはよかった。

○　その他感想

子どもが災害後、幼児返りをしたと言う保護者の方がいた。それは、「災害後の不安な状況がもたらす心身の反応なので、十分にスキンシップをしてあげてほしい」と伝えた。

○　子ども達の様子

子ども達は、災害の様子（橋が流されたことなど）をよく話していた。しかし、子ども達は思ったより落ち着いていた。

また、４年生の女子でもおんぶしてくる子がいた。スキンシップを求めていることを感じたので応えるようにした。

○　支援内容

子どもの話をさえぎらず最後まで聞くように心がけた。

○　子ども達の様子

人見知りするので、最初は静かに折り紙をしていたが、そのうち小さい子たちがうちとけてきて、話ができるようになってきた。健康観察では昨夜よく眠れなかった子が３人（姉弟、コーヒーを飲んだからと言う）時々腹痛がする子が２人だった。洪水の時に自分のお気に入りの虫取り網が流されたと話す男の子がいたが、それ以上は話さなかった。以前の小さなけがを見せに来る子もいた。

○　支援内容

被災した家の子ども達の健康観察と緊張ほぐしをした。（幼～小５年　計９名）

外部から人が入る初日だったので、まずなじむところから始め、話ができるようになってから健康観察を個別に行った。災害に関する話は特別にはしなかった。主に話の聞き役になった。

寄り添う感じで一緒に折り紙をしたり、遊んだり、弁当を食べたりして過ごした。

○　その他感想

学童保育が始まって３日目で、外部からの支援も初日のためか、特に朝は静かに学習や折り紙をして過ごした。特に遊びを先導することもせず、一緒に話しながら過ごしていたところ、低学年の子がムードメーカーになり高学年の子が次の遊びを考えて、お昼前には活気があふれてきた。子どもの日常を取り戻すことも、一つの支援であることを実感した。

学校もサポート隊もお互いに初めてだったので、気を遣っていただく場面もあり、こちらの心がまえをしっかりと持っていることが大事だと思った。

【８月３日】

○　子ども達の様子

８月３日より学校へ登校してきた児童が何人かいて、それまではみんな親戚の家などに預けられていたようだった。災害時の様子を興奮気味に話す子が２人ほどいた。

全体的に、沈んだ様子というよりハイな雰囲気だったような気がする。

○　支援内容

一人でポツンとしている子にはなるべく声をかけるようにしたことと、体育館で体を使った遊びをするように心がけた。災害のことを話してくる子どもには「大変だったね」「つらかったんだね」「がんばったね」など肯定的な声かけをするようつとめた。

○　その他感想

一日中学校にいると午後２時くらいから遊びにも疲れ、時間をもてあますようになり、家に帰りたいともらす子が何人かいた。家の人を恋しく思う気持ちを受容しつつゆっくり話を聞いてあげられるように、もっと積極的に働きかけるべきだったと反省が残る。

【８月４日】

○　子ども達の様子

多動傾向の子は落ち着いていたので、一人にしてはいけないという子をサポートした。はしゃいでいたが疲れやすく、保健室にいる時間を作った。

○　支援内容

学年の差が大きいので、学習する時間でも個別的なサポートをした。

普通に過ごせるように対応し、トラブルも落ち着いて対応できるように配慮する。

一人になりたい子、自分を見てほしい子の希望を聞いて、リラックスできるようにした。

○　その他感想

２回参加したので、学校の様子が十分把握できていた。

子どもに「また来てくれるの」と言われたが、「わからない」と返事をした。

子ども達にとっては、何回か続けて行けるといいのかもしれない。心のケアをするには継続的な対応が必要だと実感する。

○　子ども達の様子

多動児１名、今回の被災が原因か、子どもらしい明るさのない子２名が特に気になった。

○　支援内容

気になる児童を中心に「あなたに関心をもち、あなたに元気をもってほしいと願う人間がいるよ」ということを意識しながら支援した。

○　その他感想

子ども達は外で遊びたくとも家の周囲は危険で遊ぶことができないし、いっしょに体を動かすことを考えたが、実際は本の読み聞かせ、オセロ等しかできなかった。

○　子ども達の様子

小学生８名と幼稚園児４名が冷房の効いた部屋で１０時まで学習、その後は自由に過ごした。どの子も明るく、元気だった。被災地区の子どもが多かった。この子たち

との会話の中には、災害の怖さが言葉になってでてきたが、話し終えるとまた、元の元気な子どもに戻っていた。

○　支援内容

手話の挨拶や手話コーラスをしたが、みんな輝いた眼差しで一生懸命覚えようとしていた。そして、折り紙やけん玉などもした。

昼食は、話をしながら手作りのお弁当をおいしそうに食べていた。災害に遭われても、おうちの人がお弁当はきちんと作っていることに驚き、感動する。

○　その他感想

小学生の姉が幼稚園の弟の手を引いて「先生、○○ちゃんが弟の目をたたいた」弟は横で半泣き状態で見えないと訴える。棒状に丸めた新聞紙の先に切れ目を入れ、バラバラになっている部分で叩かれたという。叩いた園児に謝りなさいと言っても知らぬ顔。この時友だちという手話は両手を組むのよ、あなたたちも組んでごらんと言って二人の手と手を組ませる。「はい、二人はお友達、もう叩かないよ」と言うと二人ともうなづく。半泣きだった。手話が活かされてよかった。

○　子ども達の様子

昼食時に「水はこわかった？」と近くの子に聞くと、一瞬顔をこわばらせ、暗い表情になってうなづいた。「おばあちゃんの自転車がへんになった」とか「家は大丈夫だったけど、工場が水につかってしまった」とか言葉少なに話し、顔の表情と言葉の中に怖かったこと、被害を受けて家の人が困っている状況をしっかり受け止めているんだなとの思いが伝わり、胸にせまるものがあった。（元気に遊んでいた後だけに）

○　支援内容

その場でできる手話を使っての挨拶と手話コーラスを一緒にやった。帰り際の自由時間にも小学校の女の子たちがしていたので、気に入っていたようだった。自由時間は一緒に遊びながら交流をし、プールへ行くお別れの時は握手をし、「がんばってね」と言葉をかけた。

○　その他感想

水害に遭い、家の人もどんなにか大変だろうと思うのに、昼食時お母さんの愛情のこもったそれぞれのお弁当を見て、こちらが感動する。きっとこのパワーがあったら、立ち直ることができるだろう。「元気になってほしい」とのこちらの気持ちが伝わることを願った。

【８月５日】

○　子ども達の様子

注意深く関わろうとすると心を閉ざして、これ以上踏み込んできてほしくないといった態度が見られたり、乱暴な言葉づかいや物を投げつけてくるなどの攻撃的な態度の児童が気になった。

○　支援内容

養護教諭として精神的なケアに来ましたというような素振りは見せず、一緒に遊ぼうといった気楽な雰囲気で接するよう心がけた。

なるべく体を動かすこと（一緒にボールを使って遊んだり、かけっこをしたりする）でストレスを発散し、また、夜熟睡できるように心がけた。

○　その他感想

やはり継続した信頼関係の中で心理的援助がなされることが理想である。一日だけのサポートが被災児童にどのような効果があるかを検証する必要がある。

○　子ども達の様子

一人でいる子、グループになる子、教師のかたわらにいる子などが見られた。一緒に遊んだ子ども達からは、笑顔は見られたけどフッと顔がくもりがちになる女の子（4年）が見られたので気になった。

○　支援内容

相手の顔を見る、目線を合わせる、一緒に行動することに心がけた。遊びの中でほめたり、”ここにいるよ”といったことを相手に伝わるように心がけた。

○　その他感想

体を動かせる場、時間の確保がされてることが、子ども達の心の健康維持に不可欠なことだと思った。（イライラ解消、エネルギー発散に必要）

○　子ども達の様子

幼稚園児２名、２年１名、４年１名　計男子４名。元気いっぱいでとびまわっていた。気分にムラがあって時々べたーっと甘えてくる子がいた。

○　支援内容

スキンシップをはかろうと指ずもうをしたり、うでずもうをしたりトランプをしたりして支援活動を行なった。

【８月６日】

○　子ども達の様子

子ども達はとても落ち着いた様子だった。遊びにも積極的に参加し、楽しんでいた。児童によるバイオリン演奏会が開かれ、しっとりと音楽にひたっていた。幼稚園児で一人被災した家屋の状態や生活ぶりを話す子がいた。比較的淡々とした様子で話していた。見知らぬ顔の私たちに、とても心を開いて接してくれた。

○　支援内容

子ども達と遊びを共にし、心のふれあいを心がけた。一日関わる中で、子どもの方から遊びに誘ってくる様子も見られ、楽しいひとときを共有できた。

○　子ども達の様子

午後だけの参加で、あまり多くの子との触れ合いはなかったが、外部の大人（私たち）が毎日入れ替わり来るということにも慣れているのか、特別変わった様子は見られなかった。明るく人なつこい（表面だけかもしれないが）印象を受けた。

○　支援内容

我が校の児童に接するように、普通に声かけすることを心がけた。特別なことは何

もしていないが、周りに自分と関わってくれる大人がいるということが少しでも子どもの心の安定につながってくれれば、このサポート隊の目的は達せられるのだと思う。

○　その他感想

すばらしい自然の中で、のびのびと育った子ども達が、災害を乗り越え、１日も早く心身ともに安定した毎日が過ごせること、また地域や家庭の復旧も進んで早く元の生活に戻られることを願っている。

○　子ども達の様子

どの子もとても人なつっこくて、私自身も楽しく過ごすことができた。毎日いろいろな先生方がサポート隊で来るので、慣れた感じで遊んでいた。少し甘えた様子を見せる子もいたが、関わりを持つことで落ち着いていた。

○　支援内容

午前：学習（夏休みの宿題）、ペーパークラフト、読書、粘土遊び、工作、
　　ブロック遊び、ドッジボール、大縄等
　　→本を読んであげたり、一緒に工作したり、体を動かしたりした。

午後：ビデオ鑑賞、ゲーム、紙粘土作り等
　　→紙粘土にきれいな色をつけ、お花を作って、子ども達にプレゼントした。

○　その他感想

当日は２０人以上の子ども達が来ていたため、担任の先生方もたくさん入ってくださり、こちら側は安心して活動することができた。普段の様子を知っている先生方が近くにいるとすぐに相談もできて良かった。でも先生方は連日の作業と子どもの対応とでとてもお疲れの様子だった。先生方のケアの必要性も感じた。

何日も続いているので、遊びのネタ切れという感じもした。準備がうまくいくなら、ドッジボール大会などみんなで参加できる企画もおもしろいかなと思った。

○　子ども達の様子

思ったよりも元気な子が多く、特に気になる児童はいなかったが、女の子（３年生？）が一人、カーテンにくるまっていたことが気になった。

○　支援内容

いっしょに遊んだり話を聞くようにした。被災状況等について、羽生小学校からメモでもよいから記入したものがあるとよいと思った。

○　その他の感想

パズル等あるとよい物、準備物について追加の連絡が欲しかった。

○　支援内容

一人の児童が「玄関まで水が入ってきた」と自分から話をしてきたので、「びっくりしたね大変だったね」などの言葉かけをした。わりとケロッとして話をしてくれた。

○　その他感想

下宇坂小学校の先生方が、終日２～３人ついて下さって、先生方の方が大変だったのではないだろうか。

【８月８日】

○　その他感想

８／７（土）８（日）はサポート隊を希望してはいなかったらしく、手違いがあったようだが、羽生小の先生は、このサポートで本当に助かっているとおっしゃっていた。子ども達も「今日はどんな先生？」と毎日楽しみにしているとのこと。

【８月９日】

○　子ども達の様子

人なつっこい子が多く、よく話しかけてきてくれた。スキンシップを求める子も多いなと感じた。保育園から小学校６年までと幅広いのだが、日頃からよく知っている子ども同士なので仲がいいなと思った。

○　支援内容

半日一緒に過ごしただけだが、こちらからは学年を聞いたりするぐらいで、子どもたちの話に耳を傾けるようにした。

○　子ども達の様子

毎日入れかわり立ちかわり人の出入りがあるにもかかわらず、人なつっこく接してくる子が多かった。（人慣れしている感じ）

午後からだったので遊びにあきてくる頃かな？と思ったが、グループでおもちゃを使って工夫して楽しく遊んでいた。

落ち着きがなく、途中から人の遊びをじゃまして口げんかをするなど、集団での遊びのルールができていない子がいたが、普段から同じ様子だったらしい。もめることは少々あったが、グループでまとまって遊んでいた。

○　支援内容

できるだけ言葉かけを多くし、子ども達の言うこともよく聞くよう心がけた。幼稚園から６年生までの約２０名の子の異学年集団で遊びの内容もひとつにとどまらないため、なるべくこちらもいろんな遊びに参加した。

○　その他感想

午後からの時間帯だったが、子ども達は疲れている様子もなく遊びに集中していた。子ども達も毎日いろんな人が来て同じ質問をされると思うのに明るく接してくれたように思う。サポート隊として参加したが、遊びや大縄、ドッジボールなど身体活動を通して短い時間だったが、反対に子ども達から楽しい時間をもらった気がする。

○　子ども達の様子

たくさんの子ども達とふれあうことができた。

○　その他感想

短い時間だったが、子ども達と仲よくふれあうことができた。入れかわり立ちかわりにちがう先生が来るせいか、どの子も気軽に話しかけてくれた。しかし、限られた空間の中で過ごす時間がだんだんと長くなるにつれて、また年齢差のある子ども達を同じように扱うのはむずかしいと感じた。

【８月１０日】

○　子ども達の様子

集団での遊びの輪に入れない女児（被災児）と１対１での遊び（ゲーム、ボール遊び、バドミントン等）をしていて、笑顔が時折見られた。その後、遊びを終えた後の会話で被災後初めて被災した時の話を本人の口から聞くことができた。やや支配的な態度で他の児童に接する女児がおり、午前中の遊びの終わり頃、保健室のベッドで「寝たい」と言う。「夜眠れない」との言葉が聞かれた。

○　支援内容

２人でバドミントンをすることで、自分の心の内を話すことができたのではないかと思う。信頼関係をつくりたいと思い、名前で呼びかけたり、相手の言動を真正面から受け止めるようにしたりした。

○　その他感想

けんかなど、大人が止めに入るよりも子ども達で解決するような姿勢が見られた。子ども達も集団で行動する中で、お互いの対応を考えるようになるのかなと思った。

○　子ども達の様子

急きょ、全校登校日になったらしく、午後から来校もしくはそのまま残っている子どもは１名のみ。

○　支援内容

全校登校の際、全校対象にとった災害のメンタル的部分、身体症状の部分のアンケート集計を手伝った。

○　子ども達の様子

児童３名及びその中の祖母１名の来室があった。

表面的には明るく元気にしていた。普段の様子がよく分からないので何とも言えないが、逆にはしゃぎすぎとも受け取れた。

○　支援内容

おばあさんの話をＫ先生が良く聴いていた。このことが本日の大きな成果だった。子ども達とわずかの時間でも楽しく遊べたのはよかった。

○　その他感想

学校へ来ない児童も気になる。学校へ来ればそれなりに観察もできるが、辛いところだ。

家庭の様子を聞いていると、これからいろいろなことが保護者にも子どもにも出てくるのではないかと思うので、長期のケアが必要なことと共に、学校へ来ていない子ども達のケアも見過ごしてはならないと感じた。

【８月１１日】

○　子ども達の様子

被災した該当児童は、普段から少々落ち着きがないということだったが、妙にテンションが高くて気になった。

○　支援内容

昨日の来室者２人と誘われて来た児童１人・・・３年生

２人が宿題を持って来ていたので、勉強できるように整え、もう１人の児童と手紙を書いたり折り紙をしたりした。子ども達の心に添い、ふうせん飛ばしやゴム跳び、トランプ等をする中で、子ども達の心が解放されるよう支援した。

○　その他感想

保健室も床上浸水となり、子ども達の成長カルテが泥まみれになっていた。新しく書き写す作業等手伝いをしたかったが、時間的に無理だった。養護教諭へのサポートもこの休み中にできれば、２学期になって養護教諭自身が心身共に元気に、子ども達の心のケアに専念できることにつながると感じた。

○　子ども達の様子

Ａさん・・・時々暴力的になり、相手の子をたたいたりけったりするので気になった。子ども同士でおもちゃの取り合いになり、けんかをする場面が見られたので、しばらく話をして、遊びを通して仲直りさせた。

○　支援内容

笑顔で接し、できるだけ子どもと遊んだり、話を聞くように心がけた。

【８月１２日】

○　子ども達の様子

被災して何日かたっていたためか、ほとんどの子どもは明るく過ごしていたようだ。１年生の女の子が乱暴なことを友だちにしていた。またその子は話す内容も悲観的な事ばかりだった。被災についての話には至らなかったが、かまってほしい様子がうかがえた。

○　支援内容

友だちの輪に入れず１人で遊んでいた子どもに対しては、初めは１対１で相手をして、帰る頃にはグループの中で遊べるように心がけた。１年生の女の子に対してはたえず気にかけ、スキンシップをしたり、話をゆっくり聞いたりした。

○　その他感想

子どもへのサポートに加えて、お家の方へのサポートも大切だと思った。思ったより子どもは明るく活発であり、学校でこのようなサポート体制が効をなしているからではないかと思う。

○　子ども達の様子

午前中は１０名（男子２名、女子８名）表情は明るく、学習や自由活動に活発に取り組んでいた。子ども達との話の中では、インラインスケートが流されたとかラジオ体操がない、新しい車を買った、お風呂を作る予定など被災に関することがでてきた。

今までの引き継ぎで名前の挙がっていたＡ子は、今日は担任の先生がいらっしゃったせいか、落ち着いて学習や自由活動に取り組んでいた。２人姉妹のＢ子、Ｃ子は時々咳をしていた。また、ビデオを見ている時に姉のＢ子は指吸いがあった。

○　子ども達の様子

全部で１２人くらいの幼～６年生までの児童が勉強や遊びをしながら、終日過ごした。男子と女子のグループがあり、男子の中でけんかになりそうになった子がいた。

○　支援内容

初めて会う児童だが自分の学校にもよく似た子がいると思い、一人一人に声かけをし、絵を描く、食事をするなどのマンツーマンの対応で。児童の小さなつぶやきが聴け、そうすることで心の安定につながっていくのではと思った。

○　子ども達の様子

今後２学期が始まってからの児童の心身の変化を見守っていく必要があると思う。

○　支援内容

保健室機能の回復

・　児童の実態把握（心のケアを含む）のためのチェックリスト検討
・　流出書類の点検・補充

○　その他感想

校医による臨時健康診断や学校薬剤師による環境衛生検査を計画する等チームで子どもたちをサポートしていく必要がある。また、ブロックで連絡をとりながら、子どもの心のケアや養護教諭の負担を軽くできるように支援していきたい。

【８月２０日】

○　子ども達の様子

５名の児童が来ていた。１０時頃まで宿題の絵を描いたりして静かに学習をしていた。その後、やわらかいボールで楽しくキャッチボールをしたり打ったりして遊んだ。最初はおとなしくしていたが、遊んでいくうちに元気になり、生き生きとした顔になってきた。

○　支援内容

子ども達と体を動かして一緒に遊ぶことでだんだんうちとけてきた。４年生以下の子が多かったので楽しく一緒に遊ぶことを心がけた。

○　その他感想

午前中半日だったが、子ども達は「楽しかった！」と言って帰っていった。また、担任の先生から「昨日と今日では顔が違ってよい顔になっている」と言われ、楽しく体を動かして遊ぶということが、心のケアにはとても効果があると思われた。

② 被災校養護教諭の感想　（サポート隊の派遣順）

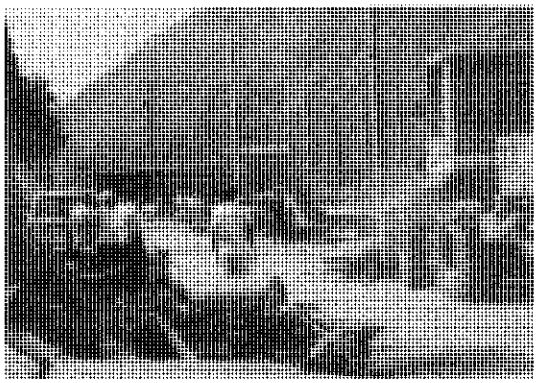
美山町美山啓明小学校

ア　はじめに

７月１８日梅雨前線が張り付くように足羽川流域に停滞し、猛烈に積乱雲を発達させた。未明の降り始めから夕方までの総雨量は、美山町で２８３ミリと観測史上最多。例年の１ヶ月分の雨量が、わずか半日間で降った計算。午前６時頃には前が見えないほどでまさに「バケツをひっくり返したような雨」と表現できる。住家の全半壊・床上浸水が約２３０戸と、大きな被害を受けた。本校では、地域あげての復旧のために臨時の児童館が開設され、職員及び県内の養護教諭サポート隊・スクールカウンセラーなどの支援を受けた。

イ　本校の被災状況

足羽川沿いに建つ本校では、校舎の一部が床上浸水となったほか、グランド・駐車場・道路などに泥やがれきが一面に残った。グラウンドは重機などの車を入れたくないこともあって、自衛隊は別にして多い時には１日１００名ほどのボランティアが入り、すべて手作業で毎日肉体労働の繰り返しであった。被災児童は２８名で、その中にはランドセルや学用品など流されてしまった児童もいる。



ウ　養護教諭サポート隊来校

町教育委員会の指示で本校の会議室に臨時児童館が開設され、学校職員で対応することとなる。その時、タイミング良く県養護教諭部会長より支援援助の電話連絡を受けた。迷うことなく受けたいと管理職に相談し、県スポーツ保健課へ依頼することで、その日から養護教諭サポート隊の来校になった。仲間だからこそ安心して安全面・心のケアをお願いし、私は担任と共に家庭訪問を開始。引きこもっていたM子が、遊びの中で養護教諭サポート隊に災害当日の様子などを話し始めたり、行動面でも落ち着きが出てきた。養護教諭サポート隊総数４６名もの来校があり、ご支援いただき、この場をお借りして感謝とお礼を申し上げたい。

美山町下宇坂小学校

ア　本校の被災状況

７月１８日の福井豪雨により、本校は高台にあり被害には直接あわなかったが、児童の家庭では床上浸水１２件、床下浸水１２件の被害があった。学校は避難所になり、また美山町の各地へ物資を運ぶ輸送地(ヘリポート)にもなった。というのも、橋や道路があちこ

ちで崩れ、陸の孤島になったところが多くあったためである。そのため豪雨直後は、子ども達の様子も見に行けず、電話も通じない状態だった。

イ　本校の心のケアの様子

○　子どもの心身状態の把握について

豪雨より３日たった２１日より、担任が全児童の家庭訪問を行い、子どもの様子を見てまわるなど、子ども達の心身の状態の把握につとめた。その後、８月１０日にあった登校日には、クラスでの健康観察を丁寧に行ってもらい、質問紙による調査を実施した。この質問紙調査は９月にも行っている。調査結果を全教職員に知らせ、また支援に来ていただいたスクールカウンセラーにも見てもらい、今後の指導に生かせるための助言をいただいた。

○　養護教諭サポート隊について

７月２４日には、臨時児童館が町内の小学校全校で開かれた。それと並行して職員もボランティアによる災害復旧作業として、床上浸水のあった美山中学校や、グランドなどに被害のあった美山啓明小学校にも参加した。臨時児童館には、３１日から養護教諭サポート隊としてたくさんの先生に来ていただき、とても感謝している。一人一人の子どもの抱えるつらさを共有し、遊びや作業を通して接してもらって、豪雨以来あまり楽しく遊ぶことができなかった子ども達にも、笑顔や元気が戻ってきたように感じた。また、臨時児童館に来る子ども達の安全面や心の面について安心して依頼できたので、その合間をぬって、担任から報告を受けた気になる児童のところへ、担任とともに家庭訪問をすることができた。

○　家庭との連携

子どもと同様に保護者も非常に大変で、子どもの心の健康を支援するためには、保護者の心の健康についてもとても大切だと思った。臨時児童館での関わりや質問紙調査の中でも、両親が毎日のようにケンカしていることをぽそっと話すなど、子ども達が不安を感じていることがうかがえた。そこで、家庭向けの便りを配布し、子どもに起きる反応や症状などを知らせるとともに、保護者への支援の一つとして地域で心の支援を行っているという情報を提供した。

また夏休み明けには、家庭での子どもの様子を詳しく知るために、健康調査用紙を配布して、気がかりなことや心配なこと、からだでの不調などを記入してもらった。それによってフォローアップすべき子どもの把握につとめ、早期に対処できるよう心がけた。

○　スクールカウンセラーとの連携

担任および保護者からの情報や保健室の来室の様子を見ていると、豪雨による心身の不調の訴えが強い児童や、継続的に見ていかなければならない児童はいなかったが、やはり専門家に子ども達の様子を見て欲しいと感じていた。そこで、支援として週に1回スクールカウンセラーに学校に来ていただいた。数人とのグループカウンセリングで、子ども達一人一人の話をじっくり聞き、気になる児童の様子を担任に伝えたり、相談を行ったりした。また、クラスで授業も行った。心のケアのために専門家の協力を得られたことは大きな力になった。

ウ　成果と今後の課題

復旧は進んでも、被災者のストレスはなかなか消えない。気持ちをほぐすために、向き合って心の内を話してもらうことが何より大切なことだと考えている。これからも、経過観察や継続的な健康観察を行い、長期的な目で見て子どもを支援していきたい。

美山町羽生小学校

ア　はじめに

７月１８日未明から降り始めた雨は、美山町で２８３ミリと観測史上最多の降水量となった。例年の1か月分の雨が、わずか半日で降ったことになる。まさに"バケツをひっくり返した"ような雨だった。

美山町では、地域をあげての復旧作業のために、「福井豪雨で大きな被害を被った」全児童を対象に、各学校に児童館が開設され、養護教諭サポート隊やスクールカウンセラーの支援をいただいた。

イ　本校の被災状況

足羽川の支流、羽生川に沿って校区のある本校では、幸い学校は被災しなかったが、間戸地区に大きな被害があった。床上浸水２戸、床下浸水２戸、車庫や蔵の浸水３戸、別の地区で、自営の工場の浸水２戸、祖父が行方不明になった児童も１名いた。また、自宅の一部崩壊や床上浸水の被害を受けた職員も５名いた。

ウ　経過及び取り組みについて

７月２０日　終業式の後、担任が間戸地区へ家庭訪問に出向く。
７月２３日　全職員で間戸地区へボランティアに出向く。
　　（その後、数回家庭訪問を兼ねて、ボランティアに出向いた。）
７月２９日　臨時の児童館を開設する。
　　（８時から１６時、常時２名体制で、土日も実施した。）
８月　２日　養護教諭サポート隊来校。（８月９日まで）
８月１３日　臨時児童館を閉館する。

エ　養護教諭サポート隊の支援に対して本校職員の感想

手作りおやつやゲーム等を持参したり、毎日周到な準備をして来校してくださったことに感謝申し上げたい。

- 被災した児童は、見た目は普通に振る舞っているように見えたが、心の内はよく分からず、専門的な目で見る養護教諭の先生に対応してもらえてよかった。
- 被災した児童の家庭の様子等を、サポート隊の養護教諭の先生方に、前もって伝えたほうがよかったのではないか。
- 十分な支援が本校職員ではできないため、養護教諭の支援がなくなった後のケアの方法について、考えさせられた。

・　全校児童が対象であったが、被災した児童だけのほうがよかったのではないか。

オ　おわりに

今回の豪雨で自分自身の自宅が一部崩壊し、しばらく出勤することができなかった。たくさんのボランティアの方に来ていただき、本当にありがたかった。自宅の復旧作業で、児童の様子を見ることができず本当に申し訳なく思っていた。その時、同じ養護教諭の仲間に助けられ、感謝の気持ちでいっぱいになった。９月には、元気な児童の様子を見ることができ、みなさんに感謝しつつ、これからも子どもの心のケアに努めていきたいと思っている。

今立町南中山小学校

ア　被災状況

７月１８日早朝よりの激しい雨で、服部川堤防が決壊したため、本校周辺が浸水した。校舎は、床上５０cmまで水に浸かり、１階部分に厚さ１０cmほどの泥がたまった。

児童の被災状況は、３４名の自宅が床上浸水。中には自宅の１階部分がほとんど水に浸かった家もあり、その時の恐怖体験が大きいことや、自営業で工場を抱えている家も多いので、復旧作業等に長い時間がかかることが予想された。

イ　復旧に伴う経過

・　１８日、水がひいた４時半頃に町教委・管理職・ＰＴＡ会長が学校に集まり、今後の対応策を検討した。２０日の終業式を予定どおり実施する方向で、作業予定を立てた。

・　１９日、子ども達を迎えるに当たっての最低限の場所の確保だけはする思いで、作業に当たった。子どもの顔が見たい、無事を確認したい、そんな教師側の強い思いがあった。町教委職員・本校職員・町内教職員・ＰＴＡ役員など総勢１００人で、１年教室・廊下・体育館・保健室・トイレ・児童玄関などの泥排出作業を実施した。応援に駆けつけてくださった方々のおかげで、２０日の終業式を予定どおり実施することができた。

・　７月２０日の終業式は、全校児童２５４名。その日の欠席９名。（内訳は、病欠２名・被災による欠席７名）。校舎の臭いや環境もよくないため、手早く各学級で被災状況を確認する。その後、集団下校とし、各集落に担当教員が付き添って下校となる。その際、集落の被災状況を確かめて帰る。

・　７月２１日、本校児童の被災状況は、３４名の自宅が床上浸水。担任が家庭訪問をして、子どもの様子や家の状況を確認した。

（ボランティアによる復旧作業が進む。７月２１日より、総勢７００人。）

・　７月２７日、集落班担当教員が、朝のラジオ体操会場に行き、子どもと話し各集落ごとの子どもの様子をみてくる。

・　７月２８日、集落班担当教員が、被災した全家庭を回り、子どもに会ってからだと

心の状態を確かめる。

・　7月31日、PTA主催による親子奉仕作業を実施。1．2年生は体育館と机をきれいにする。3．4年生は、プールをきれいにする。5．6年生は、校庭をきれいにするということで作業に当たった。この日は、話しながら作業をしようということで、担任も子どもも親も、会話をしながら作業を進めた。

今立郡養護教諭研究会で、心のチエックリスト、保護者向け・職員向け便りを作成。

・　7月28日、保健統計を進めるかたわら、心のチェックリスト、保護者向け・職員向け便りを作成した。

・　7月29日、職員向け便りを配布した。

・　8月9日、保護者向け便りを配布した。心のチェックリストは、1・2年生には無理があると保健部で話し合い、今回は見合わせた。

・　8月9日・24日の全校登校日に、個人カルテ表を使って被災児童全員の個人懇談を行った。欠席児童についても、電話連絡または家庭訪問をして状況を把握した。

今立町で、県スクールカウンセラー派遣事業による研修会を実施。

・　8月4日、カウンセラーの河野先生による「災害時における心のケア」カウンセリング研修会が実施された。

ウ　養護教諭サポート隊の援助を受けて

8月に入り、学校にやっと子ども達を呼べる状況になった。ちょうどそんな折り、サポート隊の話が入り、8月9日に全校登校日のあと、3日間保健室を開放して、健康相談会を実施することになった。本校には、9名の養護教諭サポート隊が来校。保健室に来た子どもの宿題をみたり、やりたいことに対してサポートをしていただいた。折り紙やゴム跳び、ふうせんなどで一緒に遊び、とても楽しい時間を過ごした。また、付き添いで来た祖母のくどきを聞くなど大変お世話になった。その会話の中から今後の問題点などがわかり、サポート隊から適切なアドバイスを受けた。その他に、保健ファイルの書き写し作業などもしていただいた。

学校に一人の養護教諭、その肩にのしかかった子ども達の心のケア等について、たとえ数日でも同じ養護教諭が被災地に来て、同じ職種の目で児童を見た、そのことだけでも負担が軽くなり、明日への力の源となった。

南中山地区では、豪雨による死亡者はでておらず、また全壊した家もなかったことや、水の引きが早かったことが救いだった。しかし、2学期に入り、心のバランスを崩し支援体制の必要な児童も出てきた。学校では、早期発見のためQ－Uを実施したり、校内研修を持ったりしながら常に子ども達のケアに努めている。

今回、被災校となった本校だが、大変だったけれど、ある面幸せを多く感じられた夏だった。みなさんの力をたくさんいただき、とても感謝している。今回、改めて、人のすばらしさと大きさを感じることができた。

福井市一乗小学校

一乗小学校は７月２０日（１学期終業式を中止）から復旧作業にとりかかった。まず玄関に入ることさえできないほどの土砂と、散乱した書物や倒れたロッカー、冷蔵庫などが泥水の中に沈んでいた。水の勢いとはこんなにすごいものなのか‥‥折れ曲がったシャッター、歪んだ鉄枠。豪雨から２日がたち水かさは減っていたものの、壁にくっきり残った跡が泥流のすさまじさを物語っていた。保健室は入り口の戸が歪んで開かない状態で、大きく割れたガラスの間からベッドや薬品庫、検査器具すべてが泥に埋もれているのが見えた。まさに『百聞は一見にしかず』。私たちは呆然としながら玄関前の泥すくいを始めた。この時はもう「保健室の機能」も「養護教諭」もなく、学校の復旧作業にあたるのが当然のことと思われた。その日の午前中のうちに敦賀市職員の方が、また午後には近隣の学校から多くの先生方がボランティアに来てくださった。

電気、水道、トイレは使用不能。水が無いと泥作業の能率は数段悪くなった。被害にあっていない物も泥まみれの手で運ぶため、それも汚してしまうということの繰り返しだった。今にして思えば、復旧作業にあたる本校の職員やボランティアの方の、作業中のけがの手当て、手洗い・消毒の徹底、体調管理、精神的ケア等、本来なら養護教諭としてのやるべきことがたくさんあったのだが、実際の私はそれに徹することもできず、ただただ復旧作業に追われていた。加えて７月下旬からは児童の健康状態の確認や家庭訪問、荷物整理、汚れた物品の洗い流し、重要書類の確認、失った備品の把握と請求、児童のズックや体操服の発注、市への報告。やらなければいけないことは山ほどあった。

保護者も毎日自宅の片付けに追われ、車を失った家庭も多くあった。そのような子どもや家庭の状況を知るにつれ、私たち職員は家の中だけで過ごしている子ども達を、どこかへ連れて行ってやりたいという切実な願いを持つようになった。そして県の支援を得て、８月１０日、全校児童、園児で清水町健康の森プールへ遊びに行くことが実現した。この日は私たちにとっても忘れられない夏休みの思い出として心に残っている。８月下旬からは閉鎖していた学校のプールが開放され、笑顔の子ども達で賑わった。学校はお盆から床の全面張り替え工事が始まり、連日重機の音が響く中、私たち教職員は２学期を迎えるにあたり、冊子『非常災害時における子ども達の心のケアのために』を参考に児童を受け入れる側としての学習と共通理解を図った。私自身は２学期が近づいてくると、脱力感というのか、学校が始まることへの不安を感じるようになった。他の先生方とも同じような気持ちを話し合った。

本校は学校自体が被災したために、美山町の各学校のような「避難所」や「子どもの居場所」としての機能が全くなかった。サポート隊のお話をいただいた時も、そのような支援を受け入れる態勢がなく、協力を申し出てくださっているたくさんの先生方に対して申し訳ない気持ちでいっぱいだった。復旧作業がひと息ついたお盆近く、ようやく同じ足羽ブロックから『保健室の機能回復』としてのサポートをいただいた。復旧作業では市内の先生方が泥まみれでボランティアにあたってくださり、また部会役員から心強い言葉をいただいたこと、本当に感謝している。

災害発生時は、自分の心身を守りつつ、養護教諭として多くのことをこなしていかなければならない。たとえそれができない状態であっても、他の人は養護教諭を求めてくる。

今後また保健室の機能が失われてしまうような災害があったら、そして子ども達が学校にいるときにそのような事態が発生したら、いち早くスクラムを組んで救急体制を整える「養護教諭サポート隊」の力があったらいいのではないか。今回の経験から、私は長期にわたる子どもの心のケアに対する支援同様、災害の「急性期」にこそ、養護教諭の役割が不可欠なのではないかと思った。

今立町服間小学校

７月１８日の豪雨で、服間地区全体が大きな被害を受けた。着の身着のまま逃げ出した子、祖父の死を目撃した子、様々な形で子ども達の心に深い爪跡を残した。

７月１９日午前８時、臨時招集がかかり職員一同学校へ。学校は校舎内の被災は免れたものの、校庭や側溝は土砂と流れ着いた大木や家具などで埋め尽くされていた。何からどう手をつけていいのか分からない‥‥そんな気持ちのまま児童の安否確認を急いだ。全校児童１３２名、全員の無事を確認。被災状況は全壊１戸、半壊２戸、床上浸水１３戸で、被災した児童の数は２４名だった。

７月２０日の終業式は通常通りに実施したが、被災による欠席者が９名いた。担任による家庭訪問が開始され、さらに被災した児童のところへは校長、教頭も一緒に訪問した。担任からみた児童の状況から、気がかりな児童のところへは養護教諭も同行した。同時に校舎外の復旧作業が続き、暑さの中、重い土砂を運ぶ日々の作業に職員は疲れ果てていた。作業は、本校よりもひどい被災地があるからと、ボランティアは頼まず職員のみで行うこととなり、８月中旬まで続いた。

７月２９日の今立郡養護教諭部会で、子どもの心のケアの必要性について話し合った。こういう時にこそ養護教諭として児童のために何ができるのか考えなくてはならないのだとハッとさせられた。部会では保護者向け保健だより、教職員向け資料、児童向け心のチェックリストを手分けして作成。それらを学校へ持ち帰り、本校ではどう対応していくかを検討した。

８月２日に全職員に資料を配付、また地区委員を通し全戸へ保護者向け保健だよりも配布した。その後も担任による家庭訪問は続けられ、保護者に対して子どもの心のケアの必要性を伝えていき、専門家によるカウンセリングを受けられることを知らせたが、希望者はいなかった。

８月２～６日、復旧作業もだいぶ落ち着き、水不足も解消されたことからプールを開放。多くの児童が参加した。久しぶりに友人と会って喜ぶ顔や、思い切り体を動かして元気に遊ぶ姿を見て、少し安心した。

８月１８日の全校登校日に児童向けの心のチェックリストを実施する。被災した児童の様子は、一見いつもと変わりなかったが、チェックリストにおいては、他の児童よりもチェックのついた項目が多く、心のケアの必要性を感じた。

８月１９日、２０日に県養護教諭部会から立ち上がった「養護教諭サポート隊」の支援を受けた。床上浸水以上の被災を受けた児童を対象に保健室を開放。一緒に遊んだり、夏休みの宿題をしたりしようと呼びかけたところ、１９日は３名、２０日は５名と保護者１

名の参加があった。参加児童は、一緒に折り紙をしたり、宿題をしたり、キャッチボールをしたりと楽しい時間を過ごした。サポート隊の養護教諭は、児童と初対面にも関わらず、一人一人に声をかけ心の健康状態を把握しようと努め、さらには専門的な目からみた的確なアドバイスもあった。

後の職員会議では、校長からサポート隊について全職員への報告があり、職員一同児童の心のケアの大切さを再認識した。専門家のところへカウンセリングに行こうと思っても敷居が高いが、保健室開放という形なら児童や保護者も気軽に来やすく、いい形で心のケアができたのではと担任からも良い評価を得た。参加者は少なかったものの、参加した児童が「楽しかった！」と言ってくれたことが何よりうれしかった。

９月１日の始業式には被災のための欠席者もなく、心配だった児童も落ち着いていた。健康観察を昼にも行い、放課後には職員との情報交換会をもち、児童の様子を見守っていった。

今回、この豪雨によりいろいろな経験をした。自分自身の体と心の余裕が無くなりかけていたが、部会の大きな力と、助けてくれる先輩や仲間がいることをうれしく感じた。大変だったが、人と人とのつながりや、人は助け合って生きているということを強く感じた。子ども達がこの辛い体験を力に変え、たくましく生きていってくれることを願う。

（4）「心のケア」資料づくりと活用

①　資料づくり班の活動

サポート隊とは別に資料作成班として数名の養護教諭が担当し、子ども達の心のストレス反応を把握するためのチェックリスト（児童用・生徒用）と、被災児童・生徒のかかわり方についてのポイントを示した保健だより（保護者用・職員用）、家庭訪問の記録用紙（個人票・一覧表）を作成した。

その資料をメールやフロッピーで被災校に届けた。

－　チェックリストを使用して　－

実施しただけではいけない。調査後の分析方法についても考えた上で実施することが大切である。分析はスクールカウンセラーや校医がかかわり、精神科医への受診、スクールカウンセラーとの相談活動、養護教諭との相談活動、担任やその他の教員との相談活動などにつなぐことが必要である。

資料　「心のケア」シリーズ　（巻末　８資料、Ｐ７３～７９　参照）

福井県養護教諭部会作成　平成１６年８月

項　　目	内　　容
①心のケア（保護者向け） ［一太郎］ ［Ｗｏｒｄ］	臨時保健だより 「非常災害時における子どもの心のケアについて」 ○子どもに現れる反応例 ○気をつけていただきたいこと
②心のケア（職員向け） ［一太郎］	「非常災害時における子どもの心のケアについて」 ○災害発生時の時間の経過による影響の特徴 ○学校における心のケアの方針
③ 心のチェック（生徒用） ［一太郎］ ［Ｗｏｒｄ］	「自分を知ろうチェックリスト」　中学校・高等学校用 ○心や体の変化１７項目（５段階表示）について、 当てはまるものに○をつけ状況を把握する
④ 心のチェック（児童用） ［一太郎］ ［Ｗｏｒｄ］	〃　　小学校用
⑤心のチェック（児童用） ［Ｗｏｒｄ］	〃
⑥被災児童身体状況 ［Ｗｏｒｄ］	家庭訪問時の個人記録用紙 ○被災・復旧状況、児童の様子、家族の様子
⑦被災状況一覧 ［Ｗｏｒｄ］	家庭訪問時の記録一覧表 ○被災・復旧状況、児童の様子、家族の様子

② 資料の活用

今立郡内中学校　　－ 迅速に、全職員が、共通の判断基準で －

ア　寄り添うところから

今回の福井豪雨で本校校下は大きな被害を受け、道路はもとより電気や電話も遮断されてしまった地域もあった。幸い校舎への被害がなく、被災生徒への対応や、生徒との復旧ボランティア活動に専念することができた。

１８日は、中体連地区大会の１日目であったが、競技終了後すぐに帰校することができなかった。ようやく帰校出来ても（大会２日目があることもあり）自宅へ帰れず、友達や部活顧問宅へ泊まらざるを得ない生徒もあった。家庭と連絡が取れないため、被災状況もわからず、自分の無事さえ伝えられない。被災生徒への支援は、被災初日の部活顧問から始まった。

翌１９日の大会終了後、顧問が歩いて被災生徒を送り、同時に被災状況の確認をした。２２日になってようやく道路が開通した。復旧本部の許しを得て、担任と学年主任が家庭訪問を行った。訪問前に関係職員の打ち合わせを行い、スクールカウンセラーにも生徒の様子によってはすぐに対応できるように待機をお願いした。担任との面談では特に変わった様子は見られなかったが、継続的な見守りの必要性を感じ、担任が生徒の様子を記録していくことにした。担任の観察結果から特別支援が必要と判断したのは被災より８日目、２６日であった。特別支援の内容については、この紙面が養護教諭部会作成の資料活用についてなので割愛したい。

イ　ボランティア活動を共にして

二次災害の危険がなくなり、避難していた住民が戻り始めた２２日に復旧ボランティアが被災地へ入ってきた。本校職員も被災直後は炊き出しに出ていたが、復旧作業が始まると、生徒と共に現場に入って作業をした。想像をはるかに超える被害状況の中で、生徒たちは何を感じているのだろう。一日中作業しても、復旧の気配が見えない状況であり、生徒たちに手を合わせ「ありがとう」といってくれる人々とのふれあいや、その人たちの疲労を感じとる瞬間があった。また、自分に実質的な被害はなかったが、自分の住む地域の被害を目のあたりにし、地域の人々の悲しみを感じる生徒たちに、二次的な被害はないのだろうかと危惧した。被災に似たような感覚が起こっているのかもしれない。毎日元気にボランティア活動に参加する生徒たちだが、心のチェックも必要なのではないかと強く感じた。

ウ　養護教諭仲間の力を借りて

県養護教諭部会より「心のケアシリーズ」の資料が届いたのは、８月６日であった。９日に全校登校日を控え、どの資料が利用可能か、本校バージョンに直すところはどこか、また資料をより有効に活用するための手だては何か、担当者間で話し合い、次のように３つの方針を立てた。（巻末　８資料、Ｐ７３～７９　参照）

○　「①心のケア保護者向け」を保健だよりとして配布すること

○　「②心のケア職員向け」を職員に配布し、特に「災害直後１ヶ月までの時期」にあることを強調すること

○　「③心のチェック生徒用」を全校生徒に実施し、結果を活用すること

「心のチェック」は、登校日に『ボランティア活動に参加して』という短学活が組まれていたこともあり、質問項目の１５・１６・１７（下表の網掛け部分）に生徒たちの良い意味での変化が見られるものを設定した。また、実施は朝の会で各クラスの担任がすると決めたが、被災生徒への配慮も考え、スクールカウンセラーと養護教諭が、それぞれのクラスに同席することとした。この日は、県からのカウンセラー派遣も計画されており、実施後すぐにスクールカウンセラーと結果をまとめ、研修会に活用することになった。

しかし実際には、当日は本校のスクールカウンセラーが別の学校へ派遣され、さらに養護教諭は、生徒たちの保健室来室が多くその対応に追われたため、チェックリストの集計のほとんどを郡内の養護教諭に依頼する形になった。「児童生徒への直接的なかかわり」のための養護教諭サポート隊、という認識があったため、要請を行わなかったが、生徒へのかかわりの時間確保を考えれば、サポート隊へ依頼できたことだと思う。

エ　チェックリスト活用に向けて

「心のチェック」の集計結果は次のとおりであった。（全校分）

項　　目	とてもある	少しある
１　現在の体のようす　（集計結果は省略）		
２　食欲がない、または食べすぎる。	３．２％	２２．４％
３　食べても味がしない。	０．８％	０．８％
４　眠れない。途中で目がさめる。	４．８％	２１．６％
５　こわい夢や、大雨や洪水の夢を見る。	２．４％	０．８％
６　悲しい。涙もろくなった。	４．０％	３．２％
７　何もしたくない。好きだったこともやりたくない。	４．０％	６．４％
８　だれとも話したくない。	１．６％	４．０％
９　簡単なことができなくなった。集中できない。	３．２％	８．８％
１０　心配でイライラする。	２．４％	６．４％
１１　むしゃくしゃして、乱ぼうになる。（人や物に）	４．０％	５．６％
１２　小さな音にびっくりする。	２．４％	４．８％
１３　雨の音を聞くとこわくなる。	０．８％	０
１４　テレビや新聞で災害のことを見るとこわい。	０．８％	０．８％
１５　前より人とかかわりたいと思う。	０	９．６％
１６　困っている人の世話をするようになった。	０	１０．４％
１７　みんなとなかよくしたいと思う。	０	１．６％

登校日の生徒下校後、スクールカウンセラーが作成した資料（Ｐ５４）をもとに職員研修会を開いた。内容は、被災生徒、要支援生徒の事例検討とチェックリストで気になる回答をしている生徒について、今日の様子や今までの様子などを検討しあい、聞き取り調査の対象者を絞った。全職員で気になる生徒について話し合う時間が持てたことは、その後の活動においてとても有意義であった。

気になる生徒何名かをリストアップし、担任や部活顧問による声かけや観察をすることが決まった。リストアップの名簿はクラス単位のものと、部活単位のものを用意して記録した。記録用紙には、「⑥被災児童身体状況」の内容を少し変えて使用した。しかし、対象生徒が少なかったので、この用紙に記入するよりもほとんどが口頭での連絡であった。

オ　心の健康に目を向けて

その後、対象となった生徒に担任または部活顧問が聞き取りチェックをし、職員間で話し合ったり、スクールカウンセラーに相談したりして経過観察を行った。２学期の始業式にも、「③心のチェック」を再度実施し、その変化を見た。ほとんどの生徒は落ち着き、普段の様子になっていた。心のケアは、災害時だけでなく日常生活の中でも必要である。必要と感じたとき、迅速に全職員が、共通の判断基準で動くことの大切さを忘れず今後に生かしていきたい。

カ　資料を利用して

「非常災害時における子どもの心のケアのために〈改訂版〉」（文部科学省）が、学校にあったが、被災直後はその利用まで考えが及ばなかった。また、震災後のケア用に作られた冊子なので豪雨対応とは異なっており、内容を吟味する余裕はなかった。

今回配付された資料はいずれも複数の養護教諭によって内容が考慮されており、そのまま起案へ出すことができた。また、少し手を加えることでより自分の学校にあった内容が作成できた。

チェックリストについては、各項目が生徒の実態に合っているかといった点や、注意点は何か、実施後どう活用するかということを事前に協議されていたので、使いやすいチェックリストになったと思う。自分一人で考えていたら、ここまで作成することはできなかったと思う。

「自分を知ろうチェックリスト」を活用させましょう！

チェックリストや性格診断テストなどは、生徒とのコミュニケーション をとるための、きっかけとして使用すると効果的だと思います。それをもとにして、生徒と話し、今の気持ちや日頃思っていることなどを聴いてみてはどうでしょうか。またこちらの方で気になっていることなども話し合えるといいですね。

1　個々の生徒の「自分を知ろうチェックリスト」を見て、生徒の様子を観て、気がかりなことがあったら、声をかけてみましょう。

（1）「チェックリスト」にこれまでとは異なる反応が表れていた
　　★★生徒と話す機会を積極的にもうけて、話しを聴いてみましょう。
（2）「チェックリスト」を見ると気がかりな回答、でもいつものこの生徒の性格や行動から考えると予測される回答であっても…
　　★その生徒が一人でいるときや数人でいるときなどに、「体調はどう？」「勉強はどう？」「部活はどう？」などとなるべく声をかけてみましょう。
（3）「チェックリスト」には気がかりな点はない。でも様子がおかしいぞ…
　　★★生徒と話す機会を積極的にもうけて、話しを聴いてみましょう。
（4）「チェックリスト」には気がかりな点はなく、生徒の様子もいつもと同じ…
　　☆これまで通りで。

2 学級担任だけでなく、いろいろな先生方の目と心で生徒の様子を観ましょう。

○○中学校では、学級担任、部活顧問、教科担任といろいろな先生方が、生徒の様子を観て情報交換をしていらっしゃいますね。それはとても大切なことだと思います。

夏休み中は、１，２年の生徒とは部活動で接する機会が多いです。部活顧問の先生もチェックリストに目を通し、それを心に留めて生徒と接してくださると効果的でしょう。

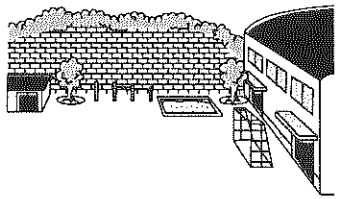
これまでも、○○中学校では、それぞれの立場で、それぞれの先生方が個性を発揮されて、生徒達と良い関係を保たれきていると思います。そして、それが土台となって、今回のような災害時でも、生徒達は安心した学校生活が送れているのでしょうね。

3　生徒と話しをするときに、こんなことに気をつけましょう。

（1）接するときは…
・悲しむことを見まもりましょう。
・泣くことを止めないでおきましょう。
・諸々の悲しみや辛さ、怒りを表すことを受け止めましょう。
◎事実がどうであったかより、気持ちがどうであったか、どう受け止めているかに焦点を当てて話しかけましょう。そして生徒が事実を話し始めたら、しっかり傾聴しましょう。

（2）話しを聴くときには…
・話しを始めるまでに沈黙が続くかもしれませんが、必要な沈黙ですから、生徒が話しを始めるまで待ちましょう。（もし、何も話さなくても、一緒にいることだけで意味があります）
・生徒が話すときは、話がとぎれるまで、黙って聴きましょう。
・そのとき生徒が話したいと思うことだけを聴くようにしましょう。
・言ってあげたい言葉は
　「無理をしないで…」　「我慢しないでいいよ」
　「いつまでたっても、悲しいのは当然だよ」
　生徒のこれまでの行動に対するねぎらいの言葉
　ボランティア活動や生徒の長所をほめる言葉
・言ってほしくない言葉
　「がんばれよ！」

これは参考です。生徒の性格や現在の様子、これまでの人間関係を考慮して対応してくださるのが良いと思います。



私たちＳＣも必要に応じて活用してください。

（○○中学校ＳＣ　　△△△△△）

5 養護教諭資質向上のための研修

福井県教育委員会、県養護教諭部会がそれぞれ主催して、現状報告と情報交換を兼ねた研修会を計画し実施した。

児童生徒 心のケア充実

福井豪雨で 県養護教諭部会 2学期控え確認

二学期スタートを間近に控え、福井豪雨で被災した児童生徒の心のケアを引き続き充実させようと、県養護教諭部会は二十六日、福井市の県生活学習館（ユー・アイふくい）で特設分科会を開き、災害時の支援体制を検証。養護教諭同士のネットワークを生かして今後も支援していくことを確認した。

約三百三十人でつくる同部会では毎年二回、研修会を開き、保健学習の在り方など七つの分科会を設けている。今夏は、福井豪雨で被災した児童生徒らへの心のケアが緊急課題と判断。他の分科会に加え「災害時の心と体のケア」をテーマにした分科会を特設した。

同分科会には二十人が参加。美山啓明小と今立町南中山小から「親が復旧作業で外出していた家庭では、ストレスで厳しい顔つきの子が多かった」「泥のイメージが強いのか、絵をかかせると茶色のクレヨンしか使わない子もいた」などと被災直後の児童の様子について報告があった。延べ百人以上が被災校に出向いた「養護教諭サポート隊」の活動については「大人が疲れていて家族に相手をしてもらえなかった子も、少しずつ心を開いてくれるようになった」と、枠を超えた支援活動の必要性をあらためて指摘する声があった。

災害から一カ月以上たった後でも、心的外傷後ストレス障害（PTSD）などが懸念されているのが実情。間脇真澄部会長は「二学期以降、被災の度合いや有無を問わず、児童生徒や家族への心のケアがますます不可欠になってくる。組織を挙げた支援を続けていきたい」と話していた。

８月２９日付　福井新聞

5　養護教諭資質向上のための研修

（1）平成１６年度養護教諭夏季研修会

①　概要

ア　主催　：　福井県学校保健会養護教諭部会

イ　対象者：　県下養護教諭

ウ　日時　：　平成１６年８月２６日（木）
（当初は７月２８日実施予定だったが、福井豪雨のため延期された）

エ　会場　：　ユー・アイふくい、鯖江市惜陰小学校、福井市足羽中学校

オ　内容　：　班別研究会

１班「応急処置」	２班「療育支援」
３班「保健学習（小）」	４班「保健学習（中）」
５班「保健学習（高）」	６班「保健室経営（小）」
７班「保健室経営（中）」	８班「災害時支援」

②　旧部会長会の開催

夏季研修会の延期決定後、被災校への支援方法の模索とサポート隊計画の立案、実施に至るまで、あわただしく時が過ぎた。その時々に応じて旧役員や先輩方からの意見や指導も受けながら、サポート隊の派遣もスムーズに流れはじめた。また被災校の状況も徐々に落ち着きだした。活動の振り返りと今後の指針を探るため、８月１３日に「旧部会長会」を開催した。活動の流れや実際の動きを振り返っていく中で、

- 豪雨が被害をもたらした地域は県内の一部であり、遠方の地域においては被害の実態がわからないこと。
- 実際にサポート隊派遣要請を出している学校が数校であること。
- 県内の多くの養護教諭が申し込みをしたにもかかわらず、距離的なことや学校との日時調整などから、サポート隊として派遣されたのが一部の養護教諭となったこと。
- サポート隊として派遣された養護教諭の声に、養護教諭としての視点や災害時の体と心のケアの重要性などが感じ取れること。

などがはっきりしてきた。そこで、この活動の内容と現時点での成果を県下の養護教諭全体のものへと広げていくために、延期となった夏季研修会に「災害時支援」として班を一つ設けることとなった。

計画にない特別班のため、班の運営は旧部会長の中から行い、対象も郡市から各１名とした。

③　夏季研修会「災害時支援」班

ア　支援活動の報告

「福井豪雨」被災児童・生徒への心のケアに係る養護教諭の支援活動について報告した。

イ　被災校の経過報告

○　美山町美山啓明小学校

７月１８日、校舎内浸水はなかったが、グラウンドや駐車場は汚泥と瓦礫の山となった。校区内の数地区が床上浸水の被災を受けた。家族が復旧作業に忙しいため、学校に臨時の児童館を開設し、児童の心のケアや健康観察に当たった。養護教諭サポート隊を受け入れて子どもたちは徐々に明るさを取り戻し、職員にも心身両面の余裕ができた。８月３０日には、校医（精神科）の出席のもと、心のケアについて学校保健委員会を開くことになっている。

○　今立町南中山小学校

７月１８日、校舎は床上５０㎝まで浸水した。自分の家の２階で水の引くのを待つなど、恐怖体験をした子どもも１０名近くいる。７月２１日からは、一般のボランティアの方が学校の清掃作業をしてくださった。７月３１日には親子で会話をしながら作業をしようと、ＰＴＡ奉仕作業の行事をした。養護教諭サポート隊には、職員が気づかなかった面のアドバイスを受けたり、家族の相談にのってもらい、とても感謝している。

２学期に入ったら、心についての保健調査をすることになっている。

ウ　今後私たち養護教諭に何ができるか

・　県養護教諭部会作成のチェックリストを、自校に合う内容に修正して使用する。スクールカウンセラーにチェックリストの見方など教えていただき、子どもたちの心のケアに使う。
・　学校保健関係の公簿が汚れてしまった被災校には、その転記という問題も残っているが、公簿を転記するというボランティア活動も必要だろう。
・　児童・生徒の心の傷がどのような形で出てくるかわからない。心の傷は時間がたってから出てくる。文部科学省から出ている冊子「子どもの心のケア」も参照にしていくとよい。
・　今回の養護教諭サポート隊の活動が、ＰＴＳＤの予防に有効だったかどうかは、短期間では検証できない。養護教諭は今後も子どもに寄り添い、子どもの変化を見逃さないようにすることが大切である。
・　養護教諭は学校に１名である。スーパーバイザーを持つとよい。組織のサポートも大事である。
・　「福井豪雨」の災害支援については、きちんとまとめて形として残さなければならない。

（２）　平成１６年度養護教諭研修会

①　概要

ア　主催　：　福井県教育委員会

イ　対象者：　福井豪雨による被災児童生徒が在籍する学校の養護教諭

ウ　日時　：　平成１６年１１月２日（火）

エ　会場　：　福井県教育研究所

オ　内容　：　情報交換ならびに協議

・　被災地校における子どもたちの健康状態と現状について

・　問題点と対策について

指導助言：福井大学保健管理センター　助教授　細田憲一氏

②　細田先生　講義　　（巻末　８資料、Ｐ８０～８３　参照）

１　自己表現がどうして治癒力になるのか

（１）枠が必要　　枠とは、外的には場所や時間

内的にはここで言ったことは秘密だ

笑ったり馬鹿にしないといった約束

↓

安全装置になる

（２）表現者が他者から見られている＝見守られている

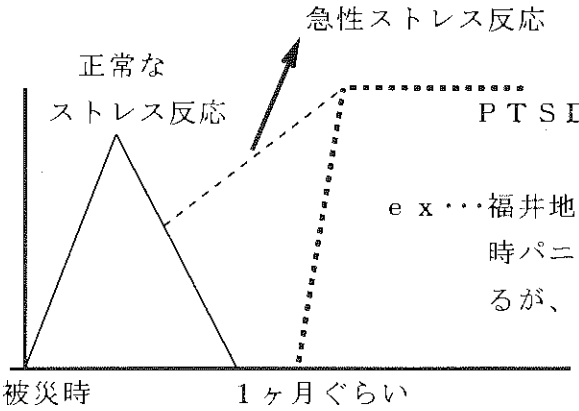
↓

治療者

‖

（３）受容的雰囲気に包まれている

２　ＰＴＳＤについて



ｅｘ･･･福井地震で被災。その後神戸で被災。その時パニック症状を起こす。現在治療中であるが、４０年前のＰＴＳＤと思われる。

＊今回はＰＴＳＤは少ないと思われる。
休日であり、親と一緒に被災した子が多い。

③　間脇養護教諭部会長より

ア　養護教諭サポート隊の結成とその活動について

県下の養護教諭を募ってサポート隊を結成し、要請のあった被災校へ派遣した。７月２９日から８月２０日までの間に、延べ１０８人の養護教諭が参加し、臨時に開設された児童館に来ている子どもたちの心のケアを中心に支援活動を行った。具体的には、ゲームや手作り紙芝居などを使って一緒に遊んだり、子どもたちの話に耳を傾けたりして、子どもに寄り添い心を通い合わせる活動を心がけた。

イ　保健だより、チェックリストなどの資料作成と活用について

サポート隊派遣と並行して資料の作成を行った。被災校では資料づくりのための時間がとれなかったり、パソコンが泥水に浸かって使用不能の状態であったため、すぐ使えるような保健だより（児童生徒用・保護者用）や、心の状態を知るためのチェックリストを作成した。

フロッピーに入れ、サポート隊が被災校へ持参したり、希望する学校へ配布した。

ウ　中越地震における新潟県養護教員研究協議会の活動について

１０月２３日に新潟県中越地方を襲った大地震により、大きな被害を受けた新潟県養護教員研究協議会へ、お見舞いとともに、「非常災害時における子どもの心のケアのために（改訂版）」（文部科学省）を差し上げた。これは、福井豪雨の際に汚れて使えなくなったり紛失した学校があったため、特別に文部科学省より送っていただき、被災校等へ配布した後手元に残っていたものである。

新潟県養護教員研究協議会の会長の先生は、最も被害の大きかった長岡市の高等学校に勤務されていて、お礼の電話をいただいたときも、まだ余震が続く中で復旧作業に追われていた。学校は避難所になっており休校を余儀なくされていたが、新潟県でもすぐに教育委員会と連携をとり、養護教諭の支援活動を始めたいというお話だった。

福井豪雨に比べ被災地が広く被害も大きかったため、養護教諭自身の安否も確認できない段階で、いち早く活動を開始しようという新潟県の養護教諭の先生たちに惜しみない協力を約束した。

④　班別研修会　報告

各班６名程度で、被災後の取り組みや現在の状況などについて話し合い、その後細田先生よりアドバイスをいただいた。

○　９月は大丈夫であったが、１０月になり欠席が目立ったりパニック症状を起こす子が出てきた。

受け止め方は個人差がある。すごく時間がたってから出てくる場合もある。クラスでの集団カウンセリングが効果的である。大人の見守りの中で表現したり、写真集などを見ながら「たいへんだったね。」と共有できることが大切である。

○　被害を受けているにもかかわらず、チェックリストに訴えのない子

チェックリストの項目にもよるが、これに（養護教諭部会作成のものは１７項

目）引っかかってくるようなら目に止まるはずである。受け止め方が違う、意識レベルにあがっていない、夢心地、防衛している、現状をとらえていない‥‥などあるので、家の人に、睡眠・食欲・集中力など尋ねる必要がある。

○　同じようなことが起こったときどう対応するか？

「あのときとは違うよ。今は大丈夫だよ。」と言う言葉が効き目があるときもある。しかし、そのレベルでないときもある。言葉で届かない部分をすでに実践されているが、手を握る、肩を抱き寄せるなどで安心させるとよい。

○　大事な人の死

儀式（セレモニー）には、必ず参加させる。でないと区切りがつけられない。認識できない可能性もある。視覚的なもので訴える。触れないで‥‥というのはよい方法ではない。そっと触れていく必要がある。

○　被災前より気になっていた子が、被災後よりひどくなっている、退行していると感じる。

水害前後の様子のチェックは必要だが、正常なストレス反応と見てもよいのではないか。この時期に出た方がよい。

○　職員に疲れがでてきているのではと心配。

避難場所としての学校（行政が入ってくる）、被災者の受け入れ、ボランティアの受け入れなど、肉体的精神的につらい思いをしている。それが癒されないまま過ぎて２学期を迎えている。

同僚の様子、そして自分自身のチェックもする。

血圧、自律神経系（食欲）、眠れない、
軽いうつ傾向（集中力が下がる、長い文が読めない、物忘れが激しい、会議に遅れる、授業を忘れるなど）

「あのころからずいぶんたちましたね。」と語りかけてみる。自信がない、イライラしているなどは異状時の正常反応であるが、みんなと同じようにしていよう、人に知られたくないと頑張り、そして落ち込む。それがうつの入り口である。本人の了解を得て管理職に話す。心身の状態を知ってもらうこと、休めるように配慮してもらうことが大事である。傷ついて快復していくという、絶対よくなる反応であることを伝える。

○　気が付きにくいが、養護教諭自身が疲れている場合もある。

自分自身が自覚することが大事である。物事に対する興味関心が薄れる、新聞記事などが読み切れない、頭に入らない、話しかけられるとおっくうになり逃げ出したくなるなどの症状があったら疲れている。そのような時は、養護教諭仲間に話を聞いてもらう。愚痴を言い合える関係づくりなど、養護教諭間のつながりを大事にする。

今回の災害で、県からは「心の元気回復応援事業」としてカウンセラーの派遣があった。児童生徒の実態把握とともに、カウンセリングが必要かどうかの判断も養護教諭が担った学校が多い。体調不良やけがを訴える児童生徒のつぶやきや様子をチェックしたり、担任からの相談、職員の健康チェック等多くの役割があった。

（３）　平成１６年度福井県養護教諭研究協議会

①　概要

ア　主催　：　福井県学校保健会・福井県教育委員会

イ　対象者：　県下養護教諭

ウ　日時　：　平成１７年２月１０日（木）

エ　会場　：　福井県織協ビル

オ　内容　：

講演　「災害を体験した子どもの心のケア　－養護教諭の役割－」

聖マリアンナ医学研究所　副所長　　藤森和美氏

班別研究協議会　〔（　）内は提案校〕

１班　保健指導のすすめ方（小学校）

２班　保健指導のすすめ方（小学校）

３班　心身に問題を持つ児童生徒へのかかわり方（小学校）

４班　心身に問題を持つ児童生徒へのかかわり方（高等学校）

５班　望ましい保健室経営のあり方（小学校）

６班　学校保健における組織活動と関係機関・地域との連携（中学校）

７班　学校保健における組織活動と関係機関・地域との連携（中学校）

②　**藤森先生の講演**　　（巻末　８資料、Ｐ８４～９１　参照）

災害発生は、予測不可能である。経験の有無にかかわらず、その災害の実態の中で、養護教諭として何が重要で、何に努力すべきなのかを考えられなければならない。今回の災害を契機に、災害時における養護教諭の役割を学んでおきたいと考え、研究協議会において「災害を体験した子どもの心のケア－養護教諭の役割－」の講演を実施した。

○　教育現場で支援が必要な災害には自然災害だけでなく、事件・事故も含まれる。どんな災害でも、子ども達に起きる現象は共通している。①具体的な現象を自分でうまく掴めない。②大人達の期待に応えようと元気に振る舞ってしまう。の２点である。これに元気であって欲しいと思う大人達の身勝手な推測が入ると判断を誤る。また事件当初、学校側は外部からの支援を拒む傾向があり、数日後～半年後になって子ども達の様子がおかしいということに気づく。

○　初期の介入が遅れると、”事故を体験した子”が、単に扱いにくい子として捉えらる。子ども達はその時の夢を見るので夜眠れず睡眠不足になり、朝方起きられずぎりぎりまで寝ている。そのため朝食を取らない、授業に集中できない、イライラする、勉強が分からなくなる、授業が面白くない、騒ぐという悪循環を起こす。また、子ども達は何もしてくれない大人に不信感を抱くようになり、子どもの保護者も混乱・困惑し、教員に対して、また逆に教員は保護者に対して不信感を抱いてしまう。

○　学校危機へのメンタルサポート（初期対応）を目的とし、文部科学省と厚生労働省の協力で非常に画期的な組織が山口県において編成された。活動内容は、①教職員へのサポート、②ケアプランの策定、③被害評価と被害者への応急対応、④被害者と家族・先生への心理教育などで、２４時間体制で待機し、活動期間は３日以内であった。

○　養教教諭の役割について

・　初期の危機介入‥‥事件や事故が起きた時、体や心はいろいろな反応を起こす（急性ストレス反応）。これは、体が助けを求めているサインであり、起こるのは良いことであるということを養護教諭は子ども・先生・保護者に伝える必要がある。

・　来室者への対応‥‥保健室の来室者が多くなることを想定し、待機する。子ども達は「自分がおかしくなってしまった」「精神病になってしまった」と言ってやって来る。普通なことだよと言い聞かせ、気分が落ち着くように対応する。保護者にも、こういう反応はむしろ健康な証拠なので、ゆっくりさせてあげてくださいと伝える。

・　正確なアセスメント‥‥同じ学校内にいても子どもによって被害の度合いが違う。何を見て、何を感じて、どんな被害にさらされたのか、個別で面接やアンケート等で調査。被害の重さが違う子どもに同一の指導や対応は非常に危険である。

・　保護者や関係者の共通理解‥‥保護者や教員に配布するようなプリントは事前に準備しておくと良い。事件・事故が起こった時には慌ただしくて、当日の配布物など作っている余裕はない。事前に作っておけばいつでも使用できる。保健室の来室状況なども普段からまとめておくと、すぐに資料として提示できる。

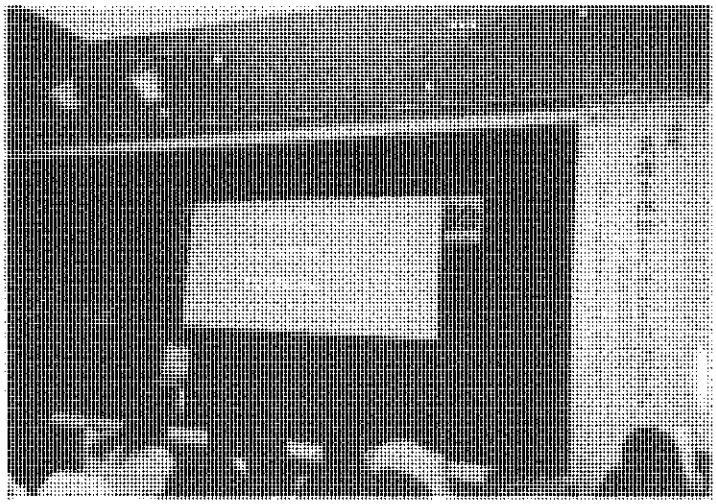
・　マスコミ等を活用して正確な情報を伝え、取材のあり方によって子どもの心にどのような影響があるかを説明し、配慮のある取材を行って欲しいことを伝える。

・　専門家による相談または医療機関への紹介‥‥学校はＰＴＳＤ等の重い病気を治療するところではない。症状の重い子どもは外部の機関に回す。

・　子ども達の回復のプロセスを見ていく、中長期的なプランを立てておくことが重要である。

○　参加者の感想

サポート隊として参加したが、思ったより元気な子ども達の姿に安心しながらも、たった１日で一体何が出来たのだろう？本当に必要だったのだろうか？と疑問に感じていた部分もあった。今日の講演で、早期の介入の必要性や、元気に見える子ども達へのサポートの必要性がわかり、自分のした行為が決して無駄ではなかったと確認できた。



写真：県養護教諭研究協議会

6 活動の成果

児童生徒が安心して素直に心を開くのは、日頃から接している家族であり、学校では学級担任や養護教諭である。毎日子ども達の心と体のケアを行っている養護教諭の、見えない部分での支援の力は大きい。

私たちは、この 20 日間の活動の成果を検証してみた。

福井豪雨

子供の心ケア急げ

自宅、学校へ専門家

7月27日付　福井新聞

6　活動の成果

①　連日暑い中で復旧作業が続き、遊び場もなくほこりが舞う中での生活を余儀なくされた子ども達は、心身に大きなストレスを抱えていた。サポート隊として派遣された養護教諭は、子どもと一緒に遊んだり話を聴く活動を通しながら心身の変化を観察し、喘息やアトピーの悪化などにも目を配るなど、心と体の両面にかかわる支援活動ができた。

②　学童保育で子ども達を学校で預かっていた被災校の養護教諭は、校外での活動に出向くことができなかったが、サポート隊の派遣により校外での指導も可能になった。特に家庭訪問においては、専門的な目で子ども達や保護者にアドバイスができた。

③　引き継ぎノートや電話連絡等の工夫で、サポート隊の連携が可能となり児童の継続観察ができるようになった。このことは、複数の養護教諭の目で細かい変化をも見つめることとなり、子ども達の実態として被災校に伝えることができた。

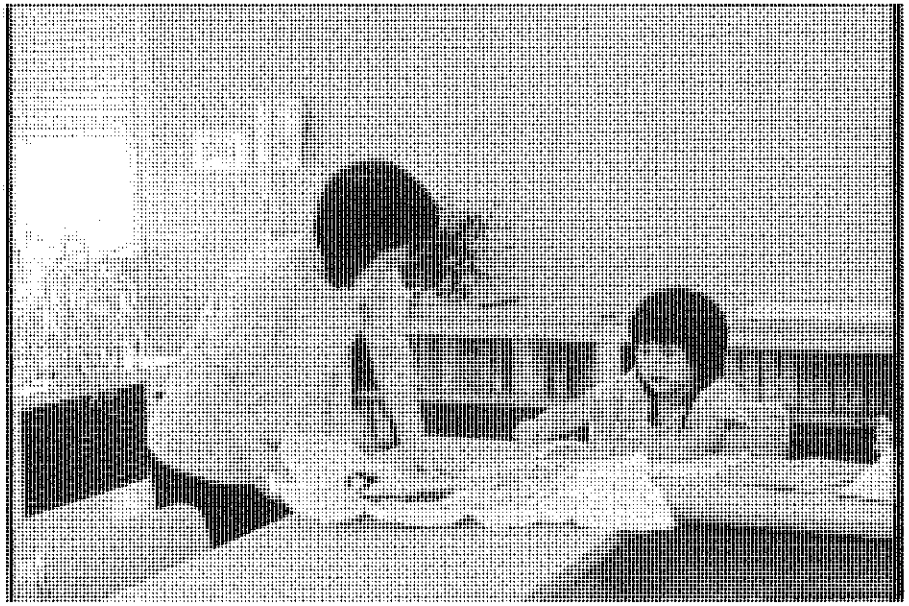
④　派遣された養護教諭と被災校の子ども達は、初対面であり１回限りのかかわりであったが、被災校の教員から「養護の先生」と紹介されると、子ども達は自分の学校の養護教諭に接するように親しく話しかけてきた。毎日交代で養護教諭がやってくることが、子ども達の負担にならないかと懸念したが、むしろストレスを抱えている子ども達にとって、同じ話を何度でも話せる機会となり、心の安定につながった。

⑤　災害時の養護教諭の役割や体制づくりの必要性について意識が高められたことは大きな成果であった。災害を目のあたりにし、災害直後の救急体制の必要性や、子ども達の心のケアにおける早急で的確な初期介入の大切さを、多くの養護教諭が実際の活動の中で学ぶことができた。

⑥　今回のサポート隊の取り組みは、今までに経験したことのない活動であり、先の見えない手探りの中での実践だったが、サポート隊の結成にあたって、延べ１０８名を派遣することができた。片道３時間近くかかる遠方からも参加があり、養護教諭として何か力になりたいという申し出に、熱い使命感を感じた。一人一人の養護教諭が、サポート隊の活動を力強く支えていることを実感することができ、県養護教諭部会の組織力を一段と高める大きな成果となった

⑦　学童保育に来ていた子ども達は明るかったので、安心すると同時にサポート隊の活動が心のケアにつながったのかどうか疑問を感じていた。しかし、「災害時の養護教諭の役割」の講演の中で、災害時に子ども達は大人達に安心させようとして元気に振る舞ってしまうという説明があり、一見元気そうに見えた子ども達にも心のケアが必要であったことが分かり、今回のサポート隊の活動は決して無駄ではなかったことを確認できた。

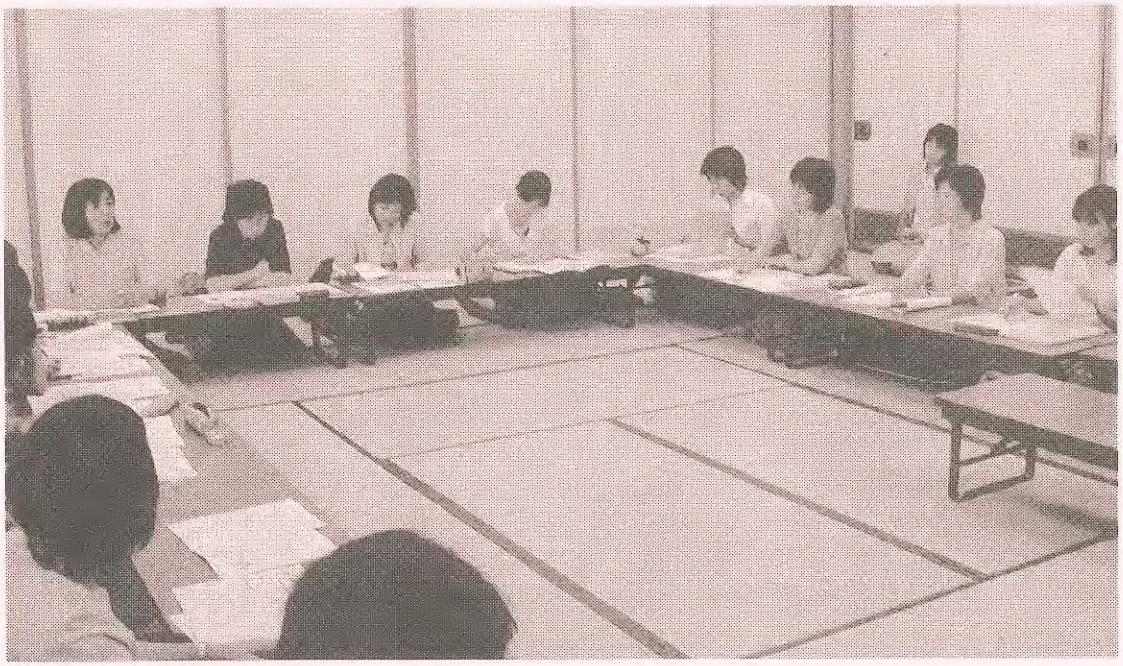
⑧　組織の一員としてサポート隊に参加しただけでなく、個人として復旧作業や保健室機能回復というハード面のボランティア活動にも加わり、被災校の養護教諭に寄り添った支援ができたのも大きな成果であった。



FBC テレビ「夕方いちばんプラス１」
８月２日放映

7 評価と課題

私たち養護教諭は、学校内で唯一、児童生徒の心と体のケアを行うことができる存在である。客観的に「養護教諭サポート隊」の分析を行い評価をすることで、「被災児童生徒への養護教諭が行う支援」を迅速に行えるよう、共有化をはかる道すじをつけていきたいと考えている。



写真：県養護教諭夏季研修会

7　評価と課題

（1）サポート隊の計画は適切であったか。

①　災害後、「養護教諭として何かできることはないか」「何かしなければ」という熱い思いがあった。被災地域での青空保健室の開設や、チームを組んでの巡回指導など、支援方法はいくつかあがったが、すぐ役に立つ資料作成と、被災校の要請に応じ養護教諭を派遣するというサポート隊ができた。被災校においては教職員も被災者であるなどの実状の中、学校内で、養護教諭としての視点を生かした支援ができたことは良かった。

②　今回の豪雨災害は、被災地が比較的狭い地域に限定されていたことと、夏季休業に入る直前の出来事であったため、サポート隊の派遣計画を立てることが可能であった。災害はいつ、どこで起きるかわからない。平常時から様々な災害を想定した支援体制を構築しておくことが重要である。

③　サポートの一環として資料（心のケアシリーズ）づくりを行った。保護者用・児童生徒用の資料や心と体のチェックリストなど、被災校で学校名を入れるだけですぐ使えるようにしたものを被災校に配布したことは、時間的余裕のなかった被災校の養護教諭にとってはすぐ活用できるものであった。しかし、チェックリストを効果的に活用するためには、その結果をどのように判定し、スクールカウンセラーや精神科医との連携にどのようにつなげていくかなどのマニュアルが必要であった。また、情報が十分届かず行き渡らない地域があったため、今後は県養護教諭部会のホームページの充実とともにダウンロードして使えるようなシステムを作っていきたい。

（2）実際の支援活動は効果的に行われたか。そのための状況のチェックを、個人及び組織で行うことができたか。

①　部会長校にサポート隊本部を立ち上げ、役員４名が県教育委員会、被災校、養護教諭間の連絡調整を担当した。被災校からの申請を受け、派遣養護教諭を決定。派遣養護教諭校へのＦＡＸ連絡、派遣養護教諭への引き継ぎや持参物などの連絡など、本部は多忙を極めた。本部の体制づくりも重要な課題である。

②　サポート隊の活動終了後、その日のうちに派遣された養護教諭から活動の報告を受け、県教育委員会へ報告するとともに次の派遣者に連絡した。毎日の終了報告を待って次へつなぐという作業はたいへんだったが、子どもたちの様子を継続して観察し、翌日の活動に生かすためには有効なシステムであった。また、派遣された養護教諭が報告を行う中で、自分の活動の評価を行うこともできた。しかし、引き継ぎノートへの記載、電話による報告、文書による報告と同じような内容の報告が重なり煩雑であったとの声もあり、効果的な報告の仕方や連絡方法についても考えて

おく必要がある。

（3）養護教諭の専門性を生かした活動だったか。

① 心のケアはカウンセラーの役割という動きがあるが、心の問題は体の問題と密接に関係しており、今回の養護教諭サポート隊の活動は、心だけでなく体の面もトータルに看ることのできる養護教諭の専門性を生かした活動であった。しかし、心身の不調を表した児童生徒について、それが災害によるものかそうでないかの見極めが難しいケースもあり、今後も専門家との連携を密にして対応にあたる必要があると思われる。

② 今回のサポート隊の支援内容を「子どもの心のケア」としたため、復旧作業に追われている初期の段階では被災校からの要請があまりなかった。学校や地域が壊滅的な打撃を受けた場合は、ハード面の復旧が優先され、目に見えない子どもの心のケアは後回しになることが多い。しかし、子どもは大人とは違った心身の変化を表すことがあり、特に小さい子どもは一度に全てを受け入れることができず、一見問題のない子に見えても心に問題を抱えている場合がある。サポート隊が被災校の養護教諭に寄り添い、第三者の立場から一緒に観察することで問題が明らかになることもあった。要請がないからといって待つ姿勢ではなく、積極的に働きかけることが大切であることを痛感した。

（4）今回の支援活動を今後に生かすことができるか。

① 今回の県養護教諭部会としての活動は、災害発生から１週間経過後のサポート隊の派遣であった。もちろん被災校においては、当該校の養護教諭が初期の対応を行っていたが、組織としての対応に時間がかかったことが反省点としてあげられる。心に傷を抱えた子どもには、急性期の適切な介入が必要であり、身体面への損傷と同様に、処置が遅れると時間の経過とともに様々な症状や問題行動となって現れることが指摘されている。今回の反省を生かし、今後は災害直後に近隣校の養護教諭がかけつけ、被災校の養護教諭の支えとなりながら被災地のニーズを把握し、そこから組織につなげるという活動ができるとよいと思われる。

② サポート隊を組織し、活動を始めた当初は何ができるのか手探りの状態だったが、「養護教諭として何かできることはないか」「何かしなければ」という熱い思いが結集して、多くの養護教諭の派遣につながった。改めて組織の結集力を強く感じることができた。また、今回の反省を踏まえ、養護教諭サポート隊のかかわった子どもたちの事例を分析し、災害時の心のケアに関する支援活動のシステムを構築したい。また、災害時の県養護教諭部会の役割を確立しておくことによって、今後の非常災害時のより迅速な対応に生かしたい。

《引用および参考文献》

文部科学省　「非常災害時における子どもの心のケアのために〈改訂版〉」
平成１５年８月発行

福井新聞社　平成１６年７月２７日付　記事
平成１６年８月２９日付　記事
「７．１８　福井豪雨　報道記録集」平成１６年１０月１０日刊

ＦＢＣテレビ　「夕方いちばんプラス１」　平成１６年８月２日放映

足羽郡美山町役場　豪雨被災写真資料

今立郡南中山小学校　豪雨被災写真資料

ＮＰＯ　日本カウンセラー協会福井県支部
代表　福井大学保健管理センター　助教授　細田憲一
平成１６年度福井県養護教諭研修会　資料
「福井豪雨被災者への支援　教育相談的対応ガイドブック」

聖マリアンナ医学研究所　副所長　藤森和美
平成１６年度福井県養護教諭研究協議会　講演資料
「災害を体験した子どもの心のケア　ー養護教諭の役割ー」
「学校の危機　ー初期の介入技法とトラウマのアセスメントー」

《編集後記》

今回のサポート隊による取り組みは、災害を受けた子ども達の心のケアに重点を置いた実践でしたが、活動のヒントとなったのは、昭和２３年６月に起こった福井地震のときの支援活動です。ちょうどその年は福井県養護教諭部会が創設された年であり、スタートして間もない時期にもかかわらず、組織の力を結集して養護教諭の専門性を生かした活動を行っています。夏休みを待って「夏期学校巡回協力班」をつくり、被災地へ慰問や救護の応援に出かけ、臨時学校給食への協力、童話・紙芝居・指人形などを使っての衛生教育、児童生徒職員に対する応急処置などを行ったという記録が残されています。さらにあの混乱期にあって、「夏期罹災学童巡回指導の手引」を作成したと記されています。通信手段や交通事情の悪いなかで、会員数９５名の養護教諭が実にすばらしい活動を実践しています。改めて先輩の偉業に敬意を表するとともに、私たちも今回の実践活動を検証して、今後へ伝えていく使命を感じています。

最後になりましたが、報告書の作成にあたり、多大なご尽力をいただきました県スポーツ保健課をはじめ、ご指導やご支援をいただきました多くの方々に深く感謝申し上げます。

平成１７年３月

編集者一同

《編　集》

福井県学校保健会養護教諭部会

福井市成和中学校	間脇真澄
福井市明新小学校	西　嘉美
池田町池田中学校	黒田千代江
福井県立春江工業高等学校	定永眞由美
福井市鶉小学校	酒井　緑
福井市森田小学校	竹内眞由美
南越前町今庄中学校	中村啓子
福井県立盲学校	田中智恵子